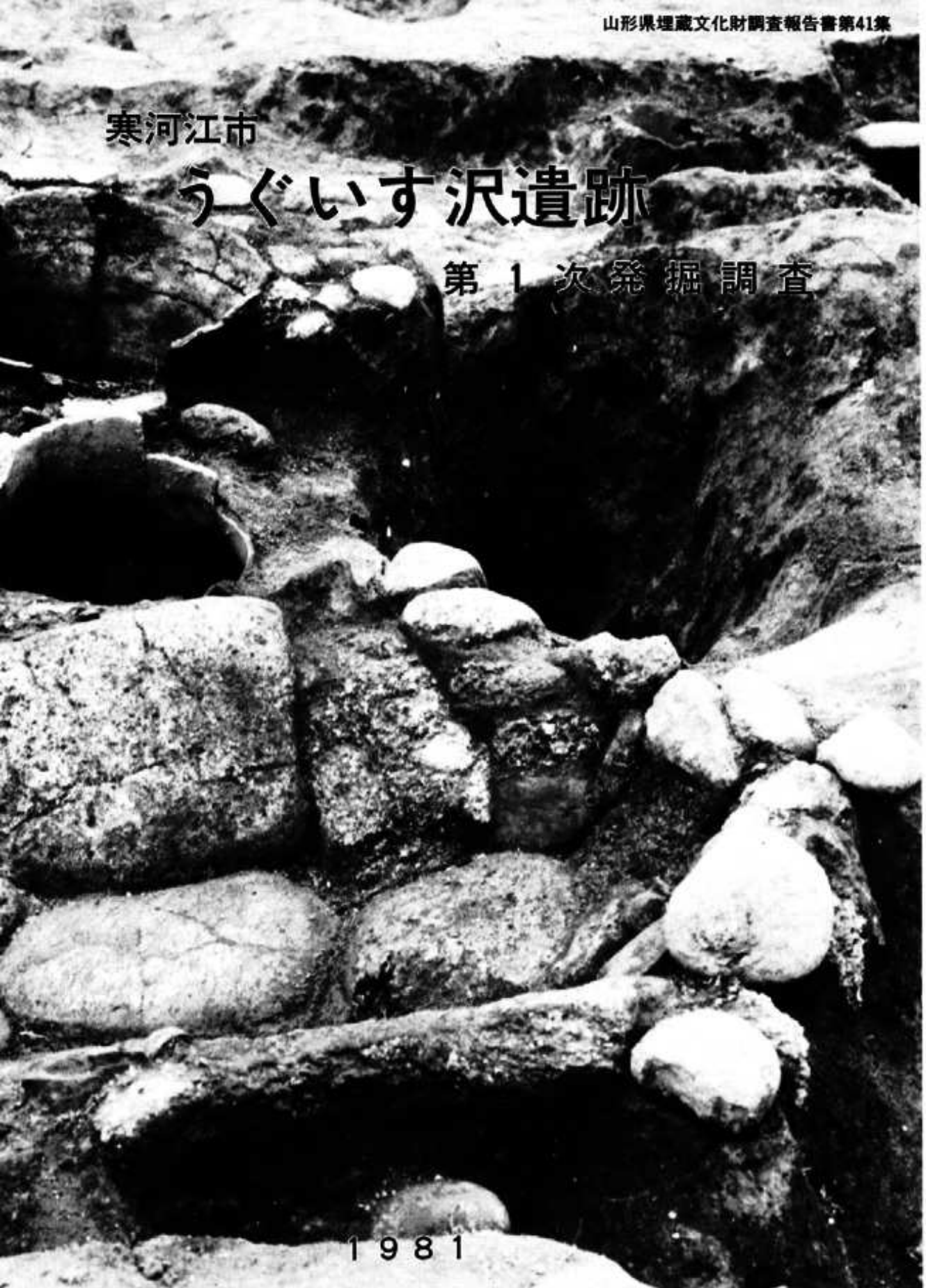
山形県埋蔵文化財調査報告書第41集

寒河江市

うぐいす沢遺跡

第1次発掘調査



1981

山形県教育委員会

さがえ
寒河江市

うぐいす沢遺跡

—第一次調査報告書—

昭和56年3月

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した一般県道中山左沢線の道路改良事業に伴うバイパス工事にかかる第一次「うぐいす沢遺跡」の発掘調査をまとめたものであります。

うぐいす沢遺跡は、縄文時代中期を主体とする遺跡で、当時の生活を物語る多くの出土品が発掘され先人の歴史をたどる貴重な資料を得ることができました。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの問題が山積しております。この両者の調整を行ない埋蔵文化財の保護をはかることは重要な課題であり、県教育委員会においては一層の努力を重ねてきているところであります。

このような意味において、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助になれば幸いと存じます。

終りに、調査にあたって適切な御指導と多大なる御協力をいただいた関係各位に心から感謝申し上げるものであります。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長　大竹正治

例　言

1　本報告書は、うぐいす沢遺跡の第1次調査の緊急発掘調査報告書である。調査は、一般県道中山左沢線の道路改良事業バイパス工事に係るため、山形県教育委員会が主体となり、昭和55年7月14日（月）から9月26日（金）まで延47日間に亘って調査を実施した。

なお、県道に新規道路の取り付け工事が着工するため、関係諸機関と協議・調整中であり、昭和56年度に第2次の緊急発掘調査を予定している。

2　調査にあたっては、寒河江市教育委員会・山形県土木部道路建設課・山形県寒河江建設事務所などの関係諸機関の協力を得て調査が行なわれ、ここに記して感謝を申し上げる。

3　遺跡の所在地は、寒河江市大字中郷上ノ代434他である。

4　調査体制は次の通りである。

調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

担当者　（主任調査員）佐々木洋治

（現場主任）佐藤　正俊

（調査員）長橋　至

名和　達朗

渋谷　孝雄

［山形県教育庁文化課］

協力　黒田富善（寒河江市教育委員会）

事務局　事務局長　浜田　清明

［山形県教育庁文化課長］

事務局長補佐　荻野　和夫

［山形県教育庁文化課長補佐］

事務局　設楽周一郎

田内　糸子

［山形県教育庁文化課主事］

5　昭和55年8月18日（月）～8月22日（金）まで、山形大学博物館実習が行なわれ、学生4名が参加した。

6　挿図縮尺は、全体・遺構図では1/40・1/60とし、遺物は土器実測図1/4・石器実測図は1/2とし、それぞれスケールを示した。

遺物の図版縮尺は、土器で1/2・1/4とし、石器では1/2・1/3とした。

本文・挿図中などの記号は、ＳＴ―住居跡・ＥＬ―炉跡・ＥＰ―柱穴・ＥＤ―周溝・壁溝・ＥＵ―埋設土器・ＳＫ―土壙・ＳＤ―溝跡であり、住居跡・土壙・溝跡などは全体に一連番号を付け、柱穴・周溝は各挿図毎一連の数字で示した。

7　本報告書は、佐藤正俊・渋谷孝雄の2名で執筆し、土器・石器実測については福島日出海君の協力を得た。本書の編集は、佐藤正俊・名和達朗が担当し、全体については、佐々木洋治が総括したものである。

目　　次

I　遺跡の立地と環境……1

II　調査の経緯

1　調査に至る経過……2

2　調査の経過……2

III　調査の概要

1　調査の方法……4

2　遺跡の層序……4

3　遺構の分布……5

4　遺物の出土状況……6

IV　遺構と遺物

1　遺　　構……7

（a）住居跡……7

（b）土　壙……12

（c）溝　跡……19

2　遺　　物……19

（a）出土土器片……19

（b）完形・一括土器……26

（c）出土石器……29

V　ま　と　め……35

挿図目次

第1図　遺跡位置・分布図

第2図　遺跡全体図

第3図　遺跡層序図……4

第4図　遺構配置図……5

第5図　2・25・26・234号住居跡……9

第6図　237号住居跡……11

第7図　28号土壙……12

第8図　39号土壙……12

第9図　146号土壙……13

第10図　151・152号土壙……13

第11図　A・Bタイプ土壙……14

第12図　B・Cタイプ土壙……15

第13図　土器実測図……27

第14図　出土石器（1）……30

第15図　出土石器（2）……31

第16図　出土石器（3）・土製品……33

図版目次

図版1　遺跡遠景　　調査区全景

図版2　遺構確認状況　遺構精査・検出

図版3　2号住居跡土層セクション他

図版4　EL24土層セクション他

図版5　1類土器群

図版6　2類土器群　　3・4類土器群

図版7　5類土器群

図版8　6類土器群　　7類土器群

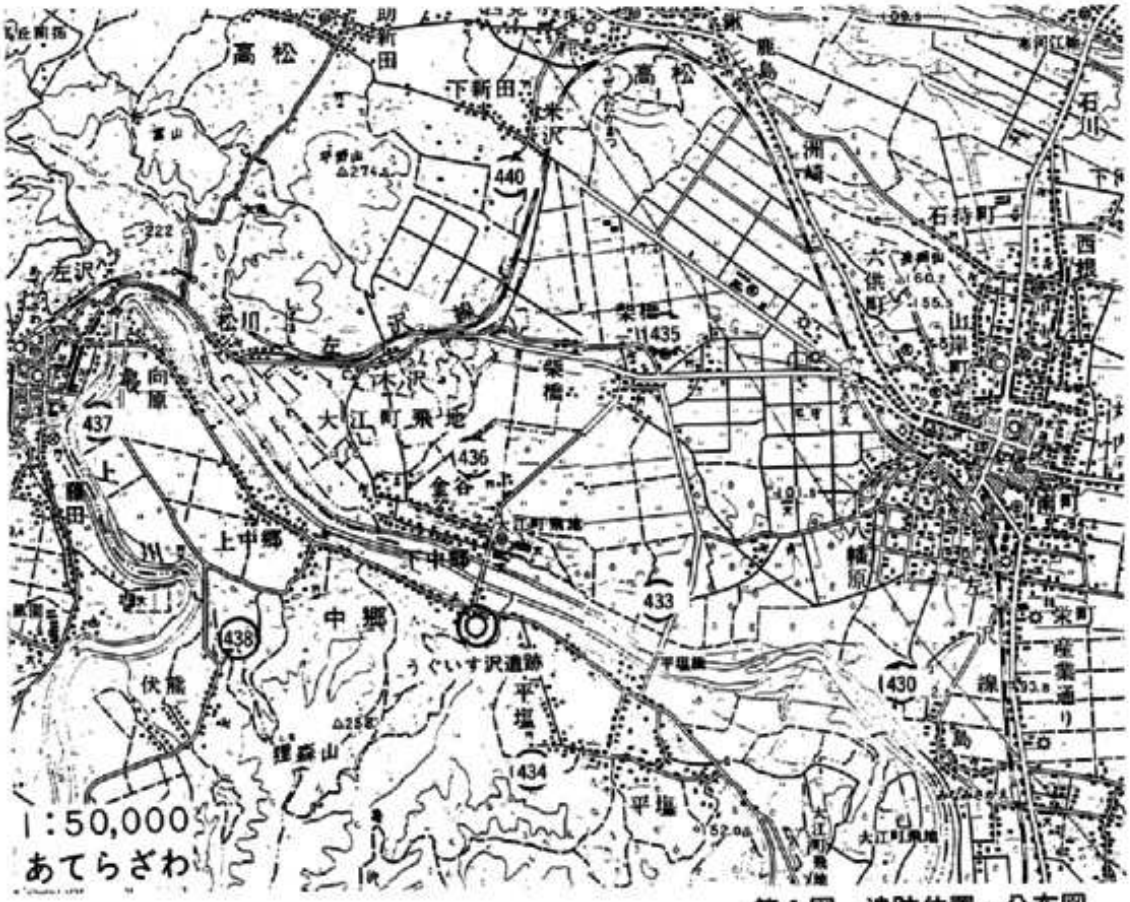
図版9　8類土器群

図版10　9類土器群　　10類土器群

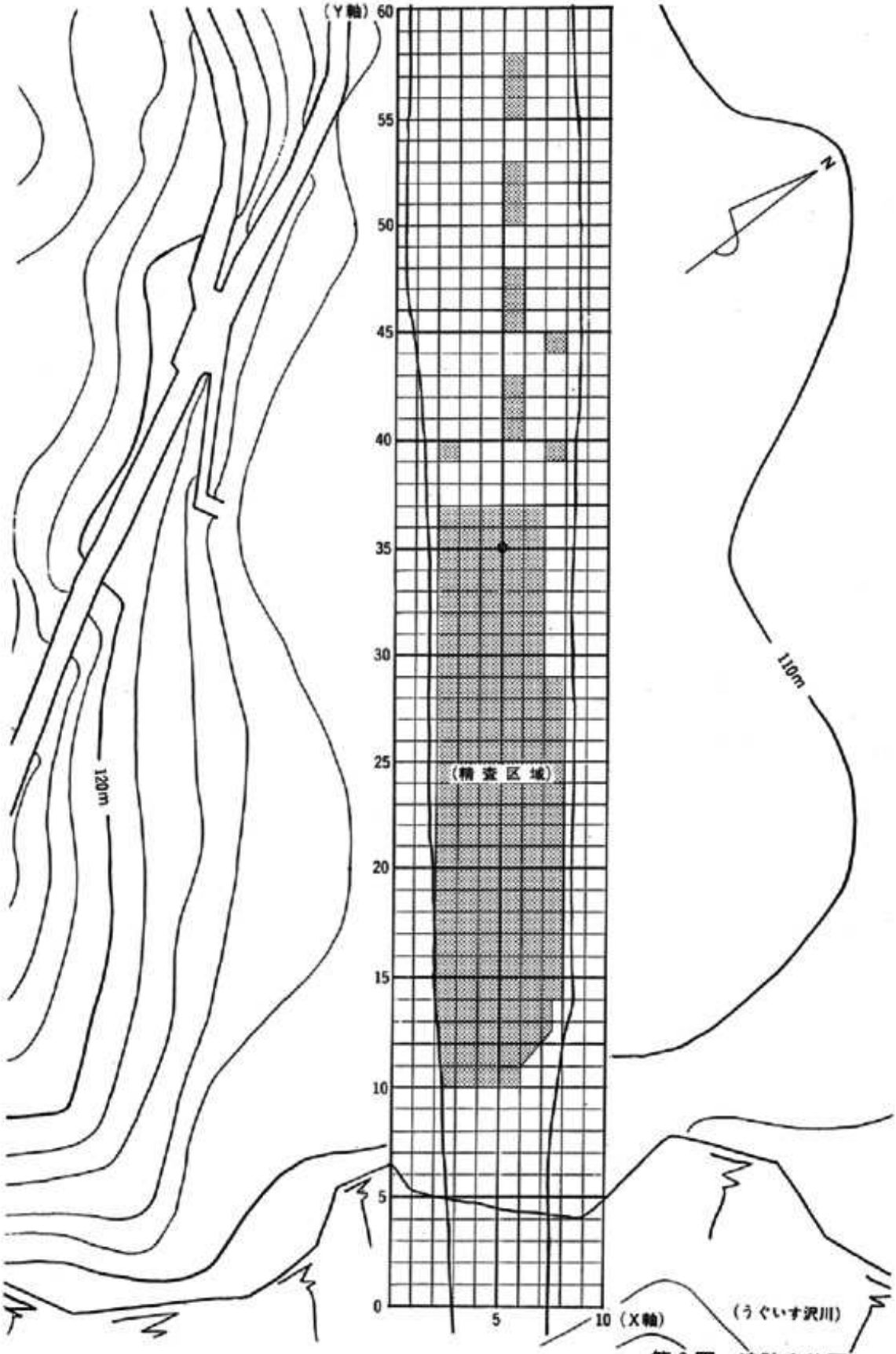
図版11　遺跡全景　　精査区全景
図版12　2・5・26・234号住居跡全景他
図版13　ＥＬ24近接　　ＥＬ70近接
図版14　ＥＬ239近接（埋設土器出土状況）
図版15　3・5・6号土壙全景他
図版16　3号土壙土層セクション他
図版17　ＥＬ233埋設土器出土状態
図版18　36号溝跡全景　28号土壙全景
図版19　7・8号土壙近接他
図版20　54号土壙近接・土層セクション他
図版21　57号土壙土層セクション他
図版22　135・136・137号土壙近接他
図版23　15・16・17号土壙全景他
図版24　203・204・207号土壙全景他
図版25　219・220号土壙全景他
図版26　完形・一括土器・土偶
図版27　出土石器（1）・（2）・（3）
図版28　出土石器（4）

付　　表

表1　うぐいす沢遺跡発掘調査行程表…3
表2　土壙一覧表（1）……16
表3　土壙一覧表（2）……17
表4　土壙一覧表（3）……18



第1図　遺跡位置・分布図


(Y軸)
60
55
50
45
40
35
30
25
20
15
10
5
0
5
10
(X軸)
N
110m
120m
(精査区域)
(うぐいす沢川)

第2図　遺跡全体図

Ⅰ　遺跡の立地と環境

うぐいす沢遺跡は、村山平野の南西部の白鷹山より延る丘陵の一部である。この地区は、最上川が南から東へ大きく蛇行し東流しており、最上川の右岸に位置している。遺跡の地形は、最上川によって開析された河岸段丘の上段の微高地上に立地し、標高108mから110mを計り、県道中山～左沢線の道路面より比高３～４mで、最上川よりは６～８mの比高差となっている。また、この微高地は東側で最上川により、南側で鷲沢川によって限られており、遺跡の全体は南東側が高く、北・北西側で低くなり傾斜している。今回の発掘調査区域は、遺跡の西側で丘陵部との境いの地区である。遺跡の現状は、畑地・果樹畑となっており、とくにブドウ・柿などの果樹が大半である。(図版１・11)

周辺の遺跡は、最上川を境として右岸・左岸の段丘上の一帯に分布しており、現在はその大半が水田地帯となっており、高瀬山遺跡群(430)をはじめとして７ケ所の遺跡がある。旧石器時代は、金谷原遺跡（436）や明神山遺跡（438）などが知られ、ナイフ形石器・石刃・彫刻刀などが出土している。縄文時代は向原遺跡（473）や高瀬山遺跡（430）などで、縄文時代中期の集落跡で大木10式期に伴う住居跡や複式炉が検出されている。縄文時代の前半や後半以後の時期や弥生時代の遺跡はあまり確認されていない。奈良・平安時代以後の遺跡は村山地方の代表的な窯跡として平野山古窯跡（440）や柴橋窯跡（435）があり、平野山窯跡は半地下式無段の構造になり、鐙瓦・丸瓦・平瓦や須恵器の杯・壺などが出土し時期は10世紀代と推定されている。この他、室町時代の平塩経塚（434）があり、昭和55年の９月に寒河江市教育委員会の分布調査により高瀬山一帯に、縄文時代中期の遺跡群などが多数発見されている。(第１図)

図版１

遺跡遠景（S↑）

調査区全景（NW↑）

II　調査の経緯

1　調査に至る経過

寒河江市には数多くの遺跡があり、「山形県遺跡地図」（昭和53年・山形県教育委員会）には、22ケ所の先史から歴史時代の遺跡が登載され、とくに最上川の段丘上に位置する。

うぐいす沢遺跡の一帯、最上川の段丘上には以前から土器や石器が多く採集されることで知られ、地元の研究者や同好の志によって収集され、うぐいす沢遺跡でも多くの遺物が採集され、縄文時代中期の遺物包蔵地として判明している。

本遺跡は、昭和55年度中に遺跡の西側の畑地・果樹畑の区域が一般県道中山～左沢線の道路改良事業バイパス工事に係ることになり、遺跡が破壊される恐れがあるため、山形県教育委員会では昭和54年10月24日に遺跡詳細分布調査を実施して、遺跡の内容・規模・性格を明らかにし、縄文時代中期後半の集落跡と判明した。これに基づいて山形県教育庁文化課では、山形県土木部道路建設課・寒河江建設事務所などの関係諸機関と充分に協議・調整を行なって、寒河江市教育委員会の協力を得て、昭和55年７月14日から９月26日まで、山形県埋蔵文化財緊急調査団によって記録保存をはかり、地元の寒河江市中郷・平塩地区の方々の作業協力により、緊急発掘調査を実施した。

2　調査の経過

調査は、昭和55年７月14日（月）から９月26日（金）まで延47日間に亘って実施された。調査経過の概要は、道路改良事業に係る面積約3600㎡について対象となり、第一段階から第四段階に分けて順次進めた。なお詳細は発掘調査行程表（表３）を参照のこと。

図版２

遺構確認状況

遺構精査・検出

表1　うぐいす沢遺跡発掘調査行程表

調査内容＼月・日		7月 14~18日	7月 22~25日	7月 28~1日	8月 4~8日	8月 18~22日	8月 25~29日	9月 1~5日	9月 8~12日	9月 16~19日	9月 22·24~26日
準備	資材準備他										(資材撤収)
準備	調査区設定	(グリッド設定)									
粗掘り	粗掘り			(精査区域の確認)							
粗掘り	重機使用			(精査区域の拡張)							
検出	遺構確認	←‐‐‐‐‐‐‐‐→				(各竪穴住居跡・土拡・溝跡)					
検出	遺構精査・検出										
遺構精査	竪穴住居跡					(ST2・25・26・234・235)	(ST13)	(ST42)	(ST237)		
遺構精査	(炉跡)					(EL24・70・71・235)	(EL・233)	(EL41)	(EL241)		
遺構精査	土拡 溝跡				(3~8−11~15G内土拡)		(3~5−16~20G内土拡溝) (6~8−16~20G内土拡・溝跡)	(3~5−21~25G内土拡)		(6~8−21~25G内土拡・溝跡) (3~5−26~30G内土拡) (6~8−26~30G内土拡)	
遺構精査	重要遺物取上げ		(石器)	(石器)	(石器・土器)		(埋設土器他の石器)				
実測	簡易遣形設定							(ST2他)			(精査区全体)
実測	平面実測							(ST2・25他)	(3~8−11~15G内土拡)(全体)		
実測	土層断面		(遺跡全体層序)			(ST2他・各土拡・層序)		(ST42・各拡・溝跡層序)		(ST237・各土拡・溝跡層序)	
実測	レベル測定		(重要遺物記録)	(重要遺物記録)	(重要遺物記録)	(重要遺物記録・ST2他・3~8−11~15G内土拡)					(遺構全体)
写真	全体写真	(遺跡遠景・近景他)			(遺構確認状況)						
写真	細部写真				(各遺構全景・層序・遺物出土状況他)						
備考	日程概略	発掘調査開始 ←(第一段階)→		←(第二段階)→		8/18~22日 山形大学博物館実習(四名) (お盆休み) ←(第三・四段階)		9/4~9/8 調査説明資料作成	――	9/18 調査説明資料完成 9/19 現地説明会(一二〇名参加)	→発掘調査終了
備考	来訪者 見学者 他	寒河江市教育委員会社会教育課 寒河江建設事務所 山形新聞	寒河江市教育委員会社会教育課	寒河江教育委員会社会教育課 河北町教育委員会	寒河江建設事務所 寒河江市教育委員会	寒河江市広報課 西村山教育事務所 寒河江市教育委員会	寒河江市教育委員会 神奈川県立鶴峰高校生徒 寒河江市立柴橋小学校生徒	寒河江市教育委員会 西村山教育事務所	寒河江市教育委員会 寒河江建設事務所	寒河江市長 寒河江市教育委員会土木部道路建設課 寒河江建設事務所 山形新聞・山形放送 寒河江市立柴橋小学校生徒 他	

III　遺跡の概要

1　調査の方法

今回の緊急発掘調査は、うぐいす沢遺跡の西端地区にあたる道路改良事業に係る道路幅20m・長さ180mで、発掘対象面積が約3600m²について実施し、とくに遺構や遺物が密集する区域（精査区域）を重点に発掘調査を進めた。

発掘調査は、事業区域内にグリッドの基線を道路中心杭に基点を設け5—35グリッドとして、グリッド基線のY軸方向をN—52°—Wを計り、3×3mを一単位とするグリッドを設定し、遺跡の南端の鷲沢川寄りからトレンチ法を併用して粗掘作業を開始し、調査の中央部寄りから南側にかけての約1150m²について大きく拡張し、精査区域を設定して調査を実施した。(第2図)

調査の進行状況（表1）は、第一段階で井桁状にトレンチをいれ遺構・遺物の密集地を確認する粗掘作業を実施し、第二段階は確認した密集地を拡張し平面精査による遺構の確認を行う、第三段階では確認した遺構の精査・検出作業を、第四段階で遺構・遺物全体の記録を中心とする作業である。

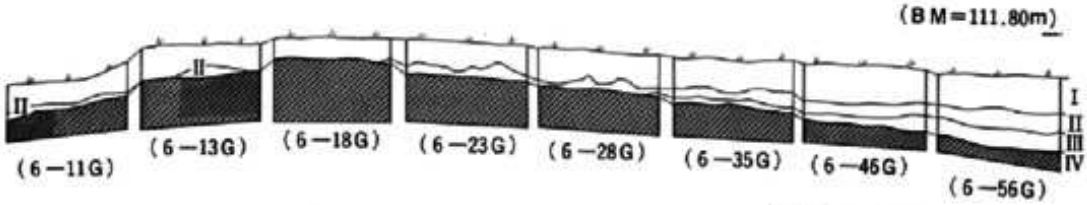
なお、県道中山～左沢線に伴う取り付道が昭和56年度に係るため、本遺跡の第2次調査が予定されている。

2　遺跡の層序

本遺跡は、最上川によって開析された河岸段丘上に立地し、全体として南・南西側が高く、北・北西側で低くなり傾斜している。遺跡の北側には、ほぼ南北に走る小谷戸がみられ低地になっている。今回の調査区では、6—18グリッド付近が高く、南東側の6—11グリッドでは鷲沢川の小段丘面に位置し傾斜地となっている。6—23グリッドから6—28グリッドにかけては緩傾斜地となり、6—35グリッド以北では急傾斜となり低位なっている。

基本的な遺跡の層序は次の4層に大別される。(第3図)

I層黒色土　　畑地・果樹畑による耕作土。とくに6—18グリッド以北では顕著にみられる。厚さ24～42cmで、上部に18～27cmの後世の客土がみられる。



第3図　遺跡層序図

II層黒褐色土　粘質微砂土で炭化粒子を含み堅くなっている。厚さは12～32cm。遺物包含層である。

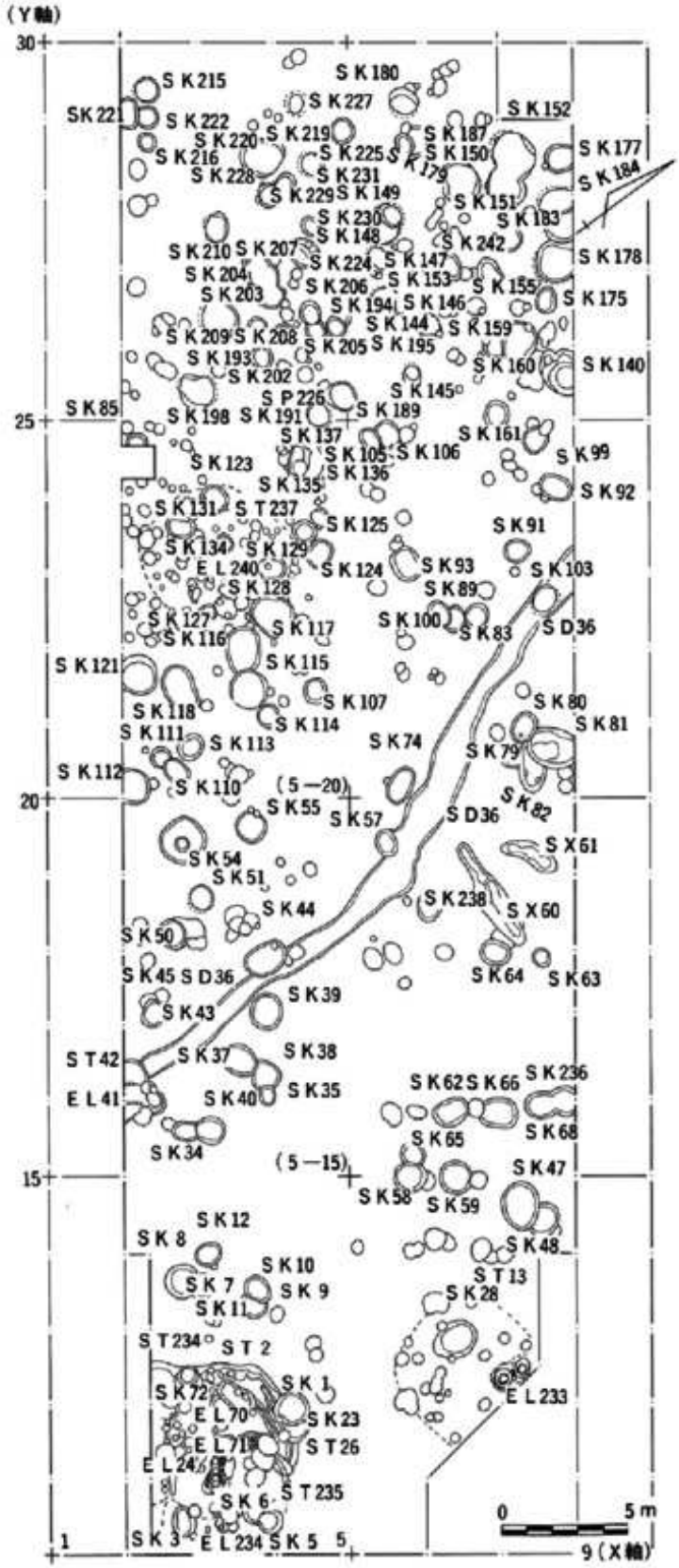
III層暗褐色土　微砂質土で炭化粒子や若干の砂礫粒が含まれる。厚さ8～28cm。遺構確認面である。6－28グリッド以北より確認される。

IV層明褐色土　部分的に黄褐色の色調となる。ローム質で砂質に富む。4～7－12～18グリッド内に小砂礫が多量にみられる。表土より24～72cmで達し、住居跡柱穴や土壙が掘り込まれている。

精査区域での遺存状態はブドウ棚の設地や柿の根による攪乱が著しく余り良くない。また、6－35グリッド以北については、果樹耕作の影響はみられず、遺存状態は良好である。

3　遺構の分布

本遺跡で検出した遺構については、竪穴住居跡8（検出6・柱穴および炉跡2）・土壙129・溝跡1・不明ピット259・不明遺構2である。遺構群は、遺跡の南西側の平坦地と傾斜



第4図　遺構配置図

に在り、標高約110.42mから111.12mを計る地区に位置し、座標軸3～8－11～30グリッドの調査区に密集して検出された。遺構確認面はIII層からIV層上部にかけて認められ、ほとんどの遺構はIV層明褐色土を掘り込んで造られている。(第4図　図版11)

分布の状態は、住居跡では南東側の傾斜地に2・25・26・234・235号および13号住居跡の重複あるいは近接した時期が6軒みられ、調査区南西寄りの平坦地に42号住居跡が、調査区中央北寄りの後傾斜地に237号住居跡が土壙群と重複して在り、部分的には重複あるいは拡張がみられるが、間隔をもって構成している。溝跡（SD36）は、調査の中央南寄りの平坦地に、曲線的にほぼ南北に走り、42号住居跡や一部土壙と重複している。土壙群は、調査区の全体に分布しているが、特に中央部南寄り付近の平坦地から北西側の緩傾斜地にかけ密集している。後述するが土壙の断面形を3形態に分類すると、Aタイプが皿形・Bタイプがタライ形・Cタイプが袋状形を示している。それぞれのタイプの分布状態は、Aタイプで3～8－11～23グリッド内の傾斜地と平坦地に、Bタイプは3～8－13～24グリッド内の平坦地から緩傾斜地に、Cタイプでは3～8－19～30グリッド内の中央部から以北にかけての緩傾斜地に多く密集し分布している。その他不明ピットが調査の全体に、不明遺構（SX60・61溝状になる）が7・8－19・20グリッド内に在る。

3　遺物の出土状況

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に約48箱を数え、それらは縄文式土器（すべて中期中葉から末葉にかけ）・土製品・石器・自然遺物（クルミの炭化片3点）などに分けられる。遺物のほとんどはII層の遺物包含層と住居跡内や土壙内覆土から出土している。

土　器：縄文時代中期　整理箱42箱（大木8式0.5%・大木9式24.5%　大木10式75%）

土製品：土偶（1）

石　器：石器・剝片など合せて整理箱6箱、同一母岩の剝片・石核が3個体

石鏃（6）・石錐（5）・尖頭器（1）・石匙（11）・打製石斧（6）

箆状石器（5）・スクレーパー（16）・磨製石斧（1）・凹石（3）

磨石（5）・石皿（1）・石棒（2）

遺物の出土状況は、包含層では調査区の中央部から南西側にかけて最も多く出土し、5－30グリッドを中心に以北については遺物の出土が希薄になり、遺構の分布状態と一致している。遺構内では、大木8式が5－26グリッドを中心に出土し、その他は全体的に遍在している。遺構内では、住居跡で覆土上層から中層に多く出土し、床付近で希薄となる。土壙は、Cタイプの袋状形を示すものでは、覆土中層から下層にかけて一括土器が多量に出土している。

Ⅳ　遺構と遺物

1　遺　　構

（a）住　居　跡

2・25・26・234・235号住居跡（第5図　図3・4・12～14）

調査区の南東側の傾斜地、3～5－11～13グリッド内に位置し、北東側で1・23号土壙と南東側で3・5・6号土壙と住居跡内で46・72号土壙と重複している。遺存状態は畑地・果樹の耕作により中央部と南西側の大半が覆土中層まで攪乱され良くない。確認面はⅣ層上部で、住居跡の構築はⅣ層を掘り込んで床面を構成している。

2号住居跡　平面形は壁および柱穴の配列からみて多角形を呈すると考えられる。大きさは推定長・短径とも5.50～5.70mを計り、確認面から床面までの深さは35cmである。床面の状態は、中央部付近が堅く踏みしめられ、若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。壁溝（ＥＤ66）は、北側から西側にかけてみられほぼ垂直に掘り込まれており、幅12～21cm・深さ24～30cmである。柱穴は12本で、ＥＰ1・2が主柱穴でＥＰ30・33・37・44・46・57・59・60・62・63が支柱・壁柱穴である。

炉跡（ＥＬ24）は、住居跡の南東寄りに位置する複式炉である。全体的には炉石が二次的に抜き取られている。長さ123cm・最大幅100cm・床面からの深さは20～58cmで長軸方向はN－52°－Wを計る。構築の状態は、燃焼部では底面から上部にかけて径5～25cmの小・中礫を用い、底面には30～35cmの平偏な礫を使用している。埋設土器部では5～15cmの礫を配している。埋設土器は深鉢形の土器で、正位の状態である。内側の埋設土器には大形の土器のまわりに、さらに土器を二重にめぐらしている。　**図版3**

2号住居跡土層セクション（W↑）

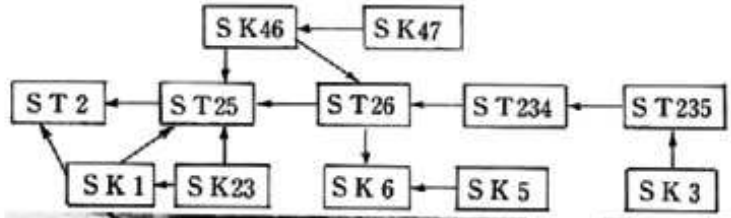
2・25・26号住居跡土層セクション（E↑）

25号住居跡　平面形は周溝・柱穴の配列からみて多角形ないし隅丸方形を呈すると考えられる。推定長・短径とも4.90～5.30mを計る。床面は全体に堅く踏みしめられ、南東側の状態は攪乱しているため不明である。周溝（ＥＤ67・68）は西側でＥＤ66と重複し、東から西側では確認できず、幅20～26cm・深さ10～15cmである。柱穴は14本で、主柱穴はＥＰ３で一本のみ確認され、支柱穴などはＥＰ５・７・21・35・36・43・48・50・55・56・61・64・65である。炉跡はＥＬ71で、全体に構造は不明であるが複式炉と考えられる。本遺跡は、周溝の状態からみて一度拡張されている。

26号住居跡　平面形は周溝の状態からみて円形を呈するとみられる。推定の長・短径は4.50～4.70mを計る。床面は若干の凹凸がみられ堅い。周溝（ＥＤ69・70）は北側と西側で確認され、南西側でＥＤ67によって切られている。柱穴は15本検出され、主柱穴はＥＰ４で、支柱穴などはＥＰ８・９・12・16・19・26・34・40～42・49・52～54で構成されている。炉跡（ＥＬ70）は、住居跡の北側の周溝（ＥＰ70）寄りに位置する複々式炉である。二次的に埋設土器や礫が抜き取られている。長径115cm・最大幅82cm・床面からの深さは20～40cmである。埋設土器はいずれも正位の状態で、内側の埋設土器の底に別個体の土器を敷きつめている。本住居跡は周溝からみて拡張していると考えられる。

235号住居跡　平面形は不明であり、炉跡ＥＬ239複式炉と周溝ＥＤ71と柱穴ＥＰ22～25・27～28で構成されている。234号住居跡は北側一部検出したのみで、大半は南側の調査区外にあり、大部分は不明である。ＥＰ18・32・58の柱穴と一部壁を確認した。

これら住居跡の時期は縄文時代中期大木10式期の所産で、新旧関係は下記の図式となる。

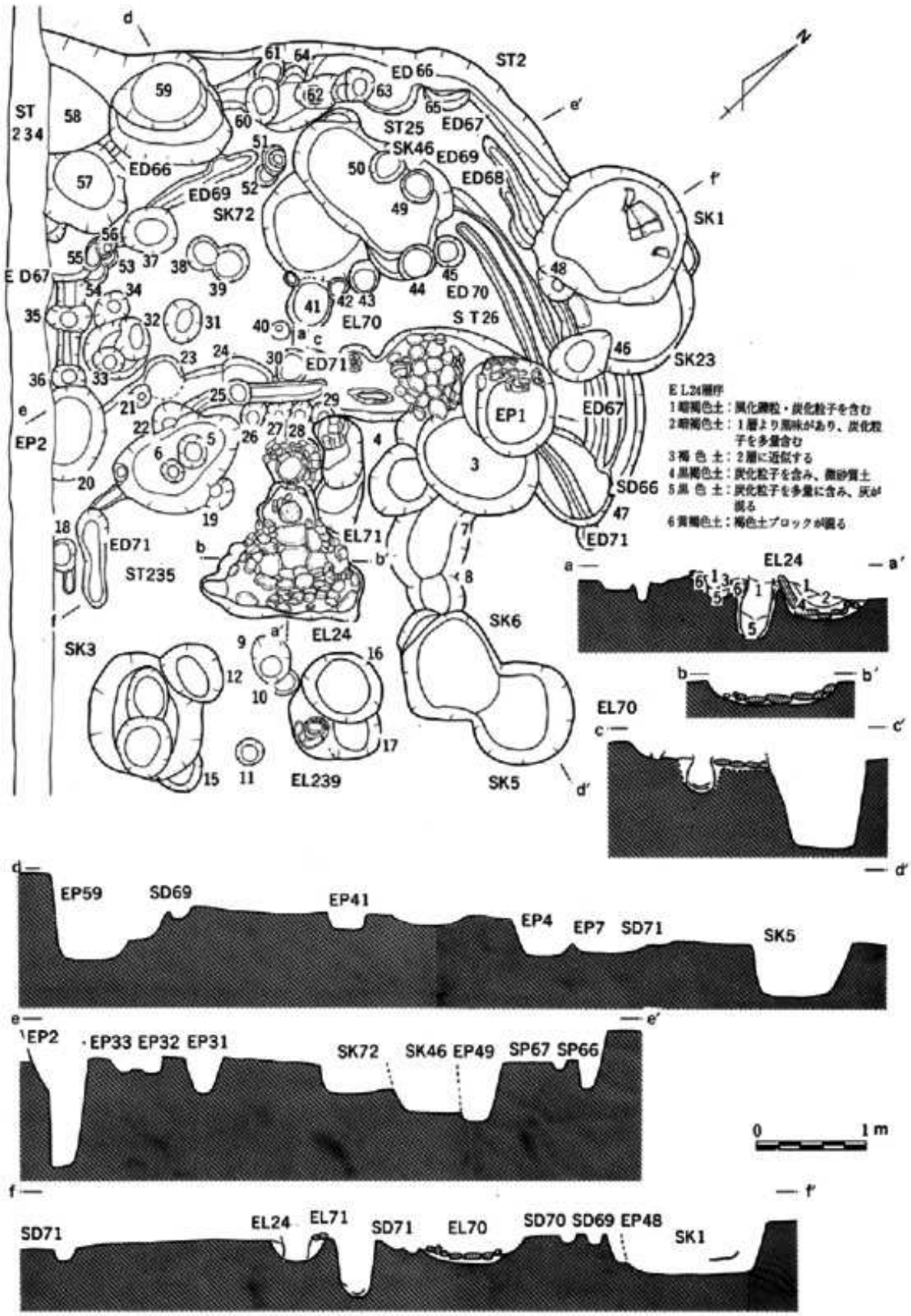


（矢印の方向は旧→新である）

図版４

ＥＬ24埋設土器土層セクション（ＳＷ↑）

ＥＬ24土層セクション（ＳＷ↑）



第5図　2・25・26・234・235号住居跡

13号住居跡（第4図　図版17）

調査区の南東側の傾斜地、6～8－12～14グリッドに在る。住居跡内西側で28号土壙と重複する。遺存状態は畑地・果樹畑の耕作によりIV層中まで攪乱を受けており、壁・床面・周溝は未確認である。平面形は、柱穴の配列からみて隅丸方形を呈すると考えられる。規模は推定長・短形5.50m前後であり、東側は調査対象外のため未検出である。柱穴は21本検出され、ＥＬ233付近に2つの主柱穴が確認される。炉跡ＥＬ233（図版17）は、住居跡北側の隅に在る複々式炉で、大半が攪乱されているため全体は不明であるが、埋設土器部先端に若干の小礫がみられ、埋設土器はいずれも正位で、二次焼成を受け、底に灰が若干堆積している。本住居跡の時期は、炉跡の埋設土器からみて縄文時代中期大木10式期の所産であり、28号土壙より新しい時期である。

42号住居跡（第4図）

調査区の中央南東よりの平坦地、3－16・17グリッド内に位置し、36号溝跡と重複している。住居跡の北東側約10分の1を検出したもので、北西側は調査区外のため未調査である。複式炉（ＥＬ41）の袖部が検出され詳細は不明である。本住居跡の時期は、床面から出土した土器からみて、縄文時代中期大木10式期の所産と推定される。

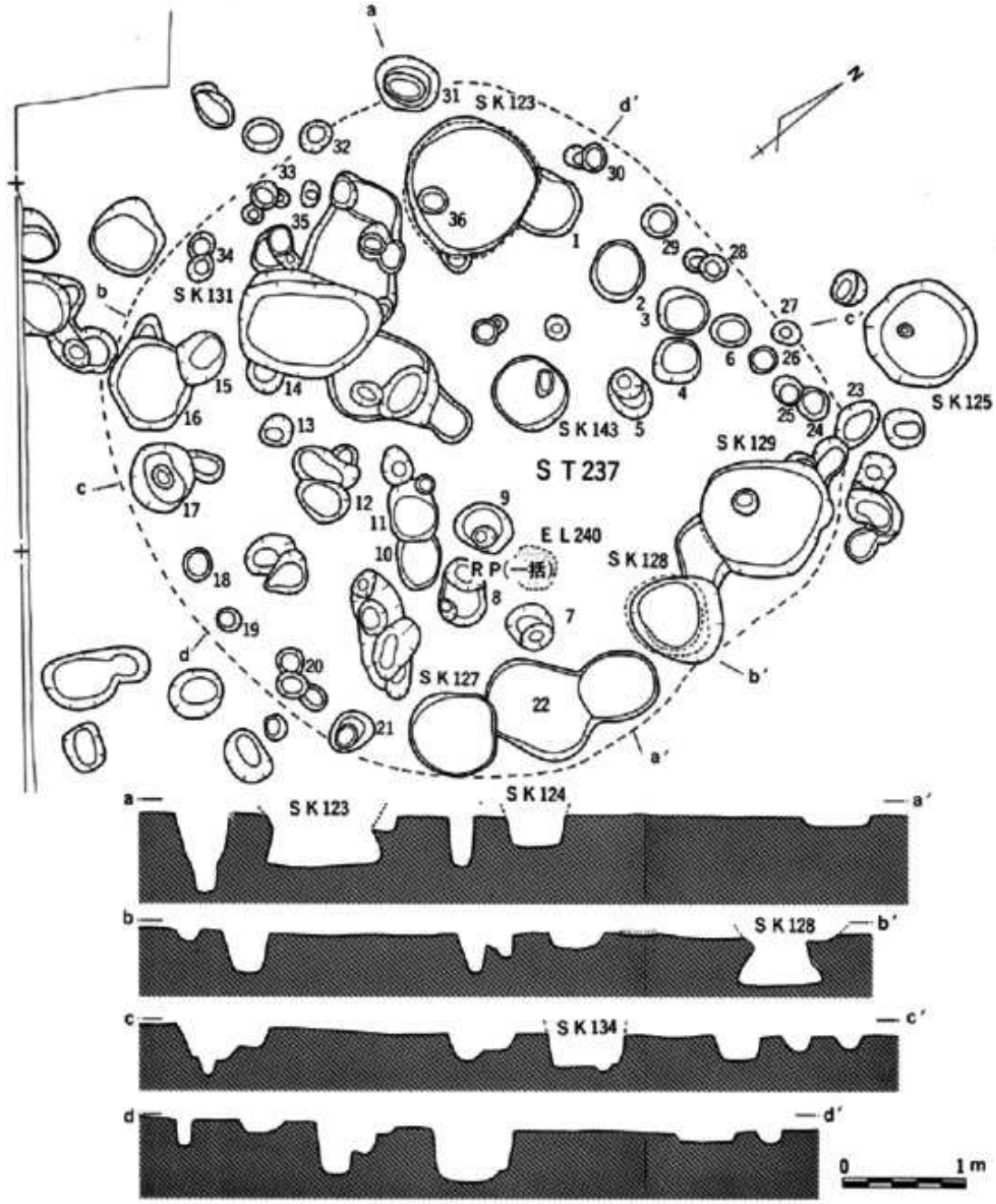
237号住居跡（第6図）

調査区の中央北西側寄りの緩傾斜地、3～4－23～25グリッド内に在り、117・127～129・123・131・134号土壙と重複しており、柱穴の配列・床面の一部・炉跡の一部でもって確認され、床面はIV層上面を若干掘り込んで造られており、壁・周溝は検出できなかった。

平面形は、柱穴の配列から考慮して楕円形を呈すると考えられる。規模は推定長径5.52m・推定短径5.24mで、長径方向はN－82°－Wを計る。床面は、ＥＰ13付近で確認され凹凸があり堅く踏みしめられている。柱穴は34本検出され、主柱穴はＥＰ5・9で径45～49cm・深さ39～42cmである。支柱穴は径15～42cm・深さ25～31cmで、ＥＰ1～7・10～34でいずれも外側に多くみられ、配列をみると二重にめぐっている。壁および周溝は未確認である。

炉跡（ＥＬ240）は、住居跡の南東側に位置している。焼土の範囲は径40cm前後で若干の掘り込みがみられる。ＥＰ8には一括土器が押しつぶされた状態として出土し、土器は二次焼成を受け、ピット底に焼土粒子や炭化粒子が堆積している。おそらく複式炉の可能性がある。本住居跡の時期は出土した一括土器からみて、縄文時代中期大木9式期の所産であり、各土壙との新旧関係は本住居跡が各土壙よりも古い。

（b）土　壙



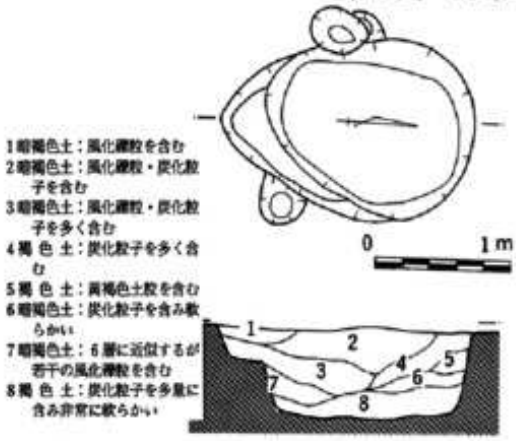
237号住居跡近景（NW↑）

237号住居跡近景（NE↑）

一括土器（RP）出土状態（NE↑）

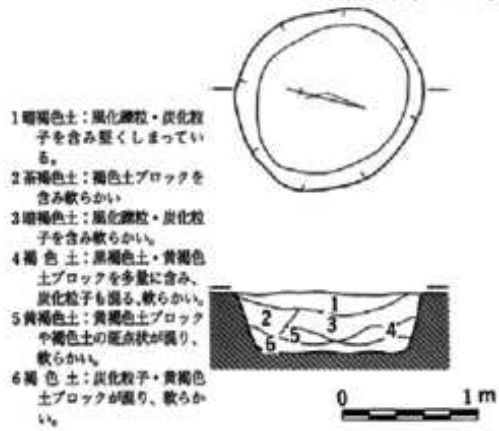
第6図　237号住居跡

第7図　28号土壙



28号土壙土層セクション（S↑）

第8図　39号土壙



39号土壙土層セクション（S↑）

28号土壙（第7図　図版18）［Aタイプ］

調査区の南東側の傾斜地、7－13・14グリッド内に在り、13号住居跡の床面を精査する際に検出された。遺存状態は良好である。

平面形は、東側がやや張り出す楕円形を呈し、長径193cm・短径138cm・深さ64cmで長軸方向がほぼ南北となっている。壁は南側が階段状になり、全体としてほぼ垂直に掘り込んでいる。壙底は中央部が凹凸になり、壁際は平坦となっている。土層の堆積状態は、南西側より流入しレンズ状になっており、3～6層にかけては急激に堆積し、全体的には自然堆積である。

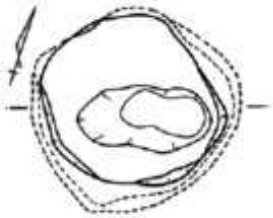
時期は、出土した遺物から縄文時代中期大木10式期で、13号住居跡より古い。

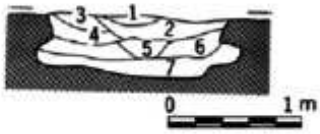
39号土壙（第8図）［Bタイプ］

調査区の中央南東側の平坦地、4・5－16グリッドに在り、西側で36号溝跡と接する。遺存状態は良好である。平面形はほぼ円形を呈し、長径143cm・短径137cm・深さ47cmである。壁はほぼ垂直に掘り込んでいる。壙底は北西側で凹凸がみられる他は平坦である。土層の堆積状態は、1～3層が北西側より自然に流れ込んでおり、4～5層にかけては中央部が若干窪むが水平に堆積し、褐色・黄褐色土ブロックや風化礫が混入され、6層も同様な土質であり、1～3層と比較すると時間的な差異がある。

時期は、縄文時代中期大木10式期の所産である。

第9図　146号土壙



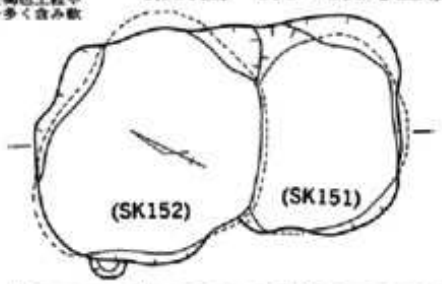


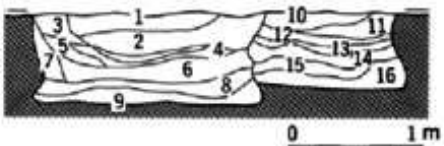
1.黒褐色土：炭化・風化礫粒が混じり、堅い。
2.暗褐色土：炭化粒子を含み軟らかい。
3.暗褐色土：炭化粒子や暗褐色土ブロックが含まれる。
5.褐　色　土：黄褐色土ブロックや炭化粒子を含み軟らかい
6.暗褐色土：褐色土ブロックや炭化粒子を含む粘質土
7.暗褐色土：炭化粒子を多量に含み非常に軟らかい。

1.黒褐色土：炭化粒子を含み堅い。風化礫が混る。
2.暗褐色土：炭化粒子を含み堅い
3.暗褐色土：炭化粒子を含み軟らかい。
4.褐　色　土：黄褐色土粒や炭化粒子を多く含み軟らかい。

146号土壙土層セクション(N↑)

第10図　151・152号土壙





5.暗褐色土：炭化粒子を非常に多く含む。
6.黒褐色土：炭化粒子を多く含み、堅い。
7.暗褐色土：黄褐色土粒を含む。
8.黒褐色土：炭化粒子を非常に多く含み、軟らかい。
9.暗褐色土：炭化粒子を含み、粘質土。
10.暗褐色土：風化・礫粒を含み堅い
11.褐　色　土：風化・炭化粒を含み堅い
12.暗褐色土：炭化粒子を含み、堅い
13.暗褐色土：炭化粒子を多く含み、軟らかい
14.黒褐色土：炭化粒子を多く含む粘質土
15.暗褐色土：炭化粒子を多量に含み軟らかい
16.褐　色　土：炭化粒子・炭化物を含む

151・152号土壙土層セクション(W↑)

146号土壙（第9図　図版25）

調査区の北西側緩傾地、6－27グリッドに在り、144・147号土壙と隣接している。遺存状態は良好である。平面形は不整円形を呈し、長径147cm・短径124cm・深さ46cmである。壁は上部で緩やかに、中位から壙底にかけて袋状に掘り込まれ、東側を除くと土壙中位でオーバーハングしている。壙底は中央から東側にかけ若干の落ち込みがみられるが他はほぼ平坦である。土層の堆積状態は、1～4層は緩やかな堆積を示し、5・6層は急激に堆積している。7層からは、炭化物（自然遺物）の砕片が多く出土し、遺物は5・6層に投棄されたように集中して出土している。時期は縄文時代中期大木10式期に相当する。［Cタイプ］

151・152号土壙（第10図）［Cタイプ］

調査区の北西側緩傾斜地、7・8－28・29グリッドに在り、150・177・242号土壙と隣接している。平面形はいずれも不整円形を呈する。大きさは151号土壙で長径185cm・短径140cm・深さ69cm、152号土壙で長径162cm・短径推定144cm・深さ53cmである。壁は、いずれも袋状に掘り込んでいる。壙底は、151号土壙で凹凸になり、152号土壙で平坦になっている。新旧関係は、土層の観察によって151号土壙が新しい。いずれの土壙も同様な堆積状態を示している。151号土壙は、3・4・5層に炭化粒子を非常に多く含み、黄褐色土粒やブロックが含まれ、交互に堆積している。とくに上層1～3層と、下層

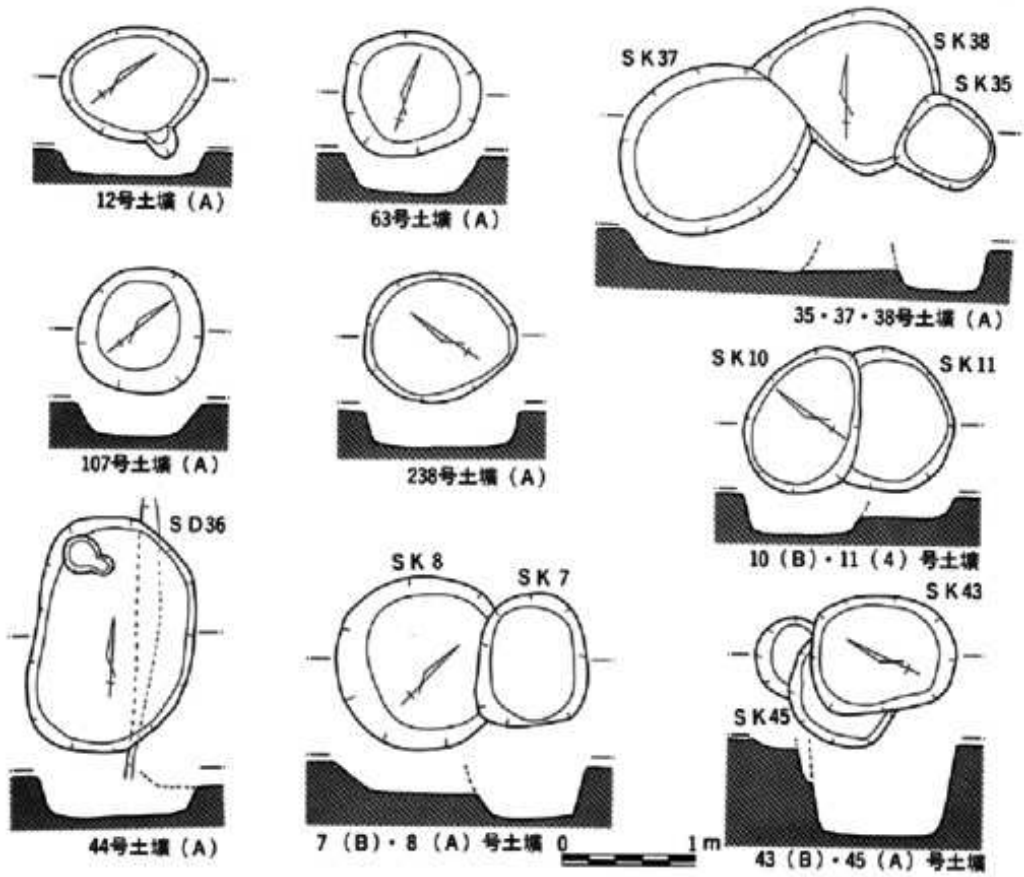
7～9層の堆積状態が異なっている。遺物の出土状況は、3～6層にかけの中層に多く出土している。時期はいずれも縄文時代中期大木10式の所産である。

今回の調査で検出した土壙は129基で、調査区の中央部から北西側にかけて多く分布している。これら土壙の断面形や覆土の状態からみて、大別して3形態に分類することができる。なお、土壙群については一覧表としてまとめた。(表2～4)

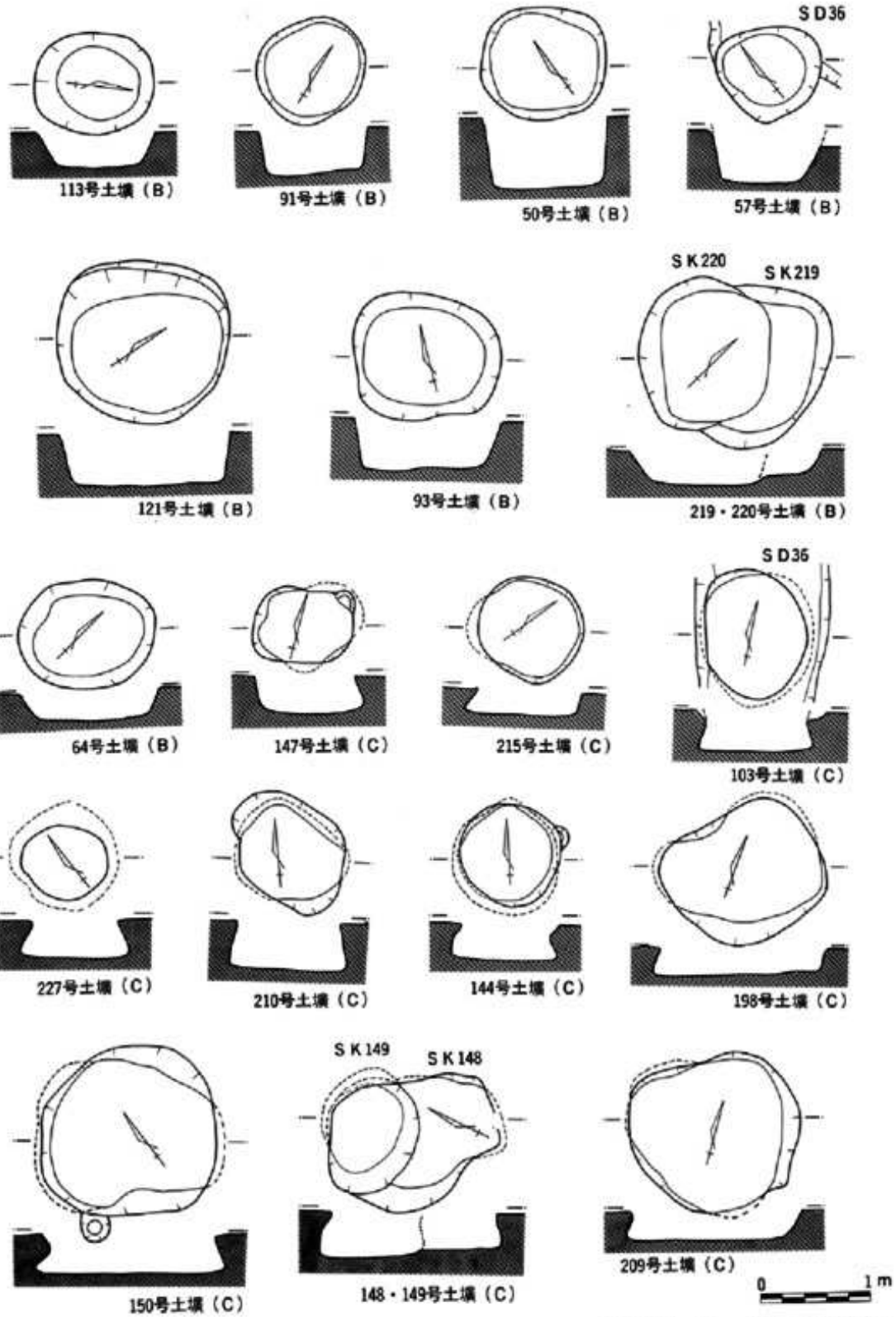
A形態：平面形が円形あるいは楕円形を示し、大きさは径50～162cmで深さ25～53cm前後である。断面形はサラ形・タライ形を呈し、覆土は変化しない。(第11図)

B形態：平面形は円形・楕円形を呈し、大きさは径100～160cm・深さ30～45cm前後である。覆土の状態は、中層で黄褐色土・褐色土中に風化礫や黄褐色土ブロックが混り、レンズ状に堆積している。断面形はタライ形を示す。(第11・12図)

C形態：平面形は円形・不整円形を呈し、大きさは径80～160cm・深さ40～60cm前後である。断面形は、袋状を呈している。覆土は、中層に黒褐色土・暗褐色土中に黄褐色土粒子が含まれ交互に堆積し、遺物の投棄現象がみられる。(第13図)



第11図　A・Bタイプ土壙



第12図　B・Cタイプ土壙

表2　土拡一覧表（1）

（単位：cm）

土拡番号	地区名	上部平面形	規模(長径×短径)	深さ	壁の掘込状態	底面の状態	種別	時期	備考
SK1	4･5―12･13	円形	142×140	55	ほぼ垂直	平坦	B	大木10	ST2・SK23と重複
SK3	3―11	楕円形	114×104	53	緩やか	中央部凹凸	A	大木9	
SK5	4･5―11	不整円形	100× 92	40	ほぼ垂直	平坦	B	大木10	SK6と重複　SK6新
SK6	4･5―11	円形	(100)× 98	36	ほぼ垂直	平坦	B	大木10	SK5と重複　SK6新
SK7	3･4―14	不整円形	99×82	37	ほぼ垂直	西側に傾斜	B	大木10	SK8と重複　SK7新
SK8	3―14	円形	(135)×130	22	緩やか	平坦	A	大木10	SK7と重複　SK7新
SK9	4･5―14	円形	98×94	27	緩やか	平坦	A	大木10	
SK10	4―14	楕円形	118× 86	30	ほぼ垂直	西側に傾斜	B	大木10	
SK11	4―14	円形	108×(100)	15	緩やか	平坦	A	大木10	SK10と重複　SK10新
SK12	3･4―14･15	不整円形	108× 88	15	緩やか	平坦	A	大木10	
SK23	4･5―12･13	円形	(120)×(110)	20	ほぼ垂直	平坦	B	大木10	SK1と重複　SK1新
SK34	3―16	楕円形	(115)× 57	20	緩やか	平坦	A	大木10	SK40と重複　SK40新
SK35	4･5―16･17	不整円形	64×60	38	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK38と重複　SK35新
SK37	4―17	楕円形	147×120	31	緩やか	平坦	A	大木10	SK38と重複　SK37新
SK38	4･5―17	不整円形	118×(116)	28	緩やか	凹凸	A	大木10	SK35･37と重複　SK38古
SK40	3･4―16	円形	118×100	26	緩やか	平坦	A	大木10	SK34と重複　SK40新
SK43	3―18	不整円形	110× 87	72	ほぼ垂直	平坦	B	大木10	SK45と重複　SK43新
SK44	4･5―18･19	楕円形	177×120	27	ほぼ垂直	西側に傾斜	A	大木10	SD36と重複　SD36新
SK45	3―18	不整円形	82×(80)	32	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK43と重複　SK43新
SK46	4―12･13	不整方形	152× 94	50	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	ST2・25・26と重複　古い
SK47	8―15	楕円形	181×133	25	緩やか	平坦	A	大木10	SK48と重複　SK47新
SK48	8―15	不整円形	123×(118)	20	緩やか	凹凸	A	大木10	SK47と重複
SK50	8―19	不整円形	114×104	63	垂直	中央部凹凸	B	大木9	
SK51	3･4―19	円形	104× 93	30	西側袋状	凹凸	C	大木10	
SK54	3･4―20	不整円形	187×168	34	緩やか	平坦	A	大木10	中央部にピットあり
SK55	4―20	円形	124×120	18	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK57	6―20	不整円形	100× 91	47	垂直	平坦	A	大木10	SD36と重複　SK57新
SK58	6―15･16	円形	113×110	50	垂直	平坦	B	大木10	SK65と重複　SK58新
SK59	7―15･16	円形	140×120	35	垂直	平坦	B	大木10	
SK62	7―16･17	楕円形	140×130	34	垂直	平坦	B	大木10	
SK63	8―18･19	円形	109× 93	25	緩やか	平坦	A	大木10	
SK64	7･8―18･19	円形	110× 98	30	垂直	凹凸	B	大木10	
SK65	6―16	円形	117×100	31	垂直	平坦	B	大木10	SK58と重複　SK58新
SK66	7･8―16･17	楕円形	160×120	34	垂直	平坦	B	大木10	
SK68	8･9―16･17	円形	143×(121)	42	垂直	平坦	B	大木10	SK236と重複　SK68新
SK72	4―11･12	円形	94×(89)	34	緩やか	中央が窪む	A	大木10	SK46と重複　SK46新
SK74	6―21	楕円形	158× 98	26	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK79	8―21	円形	58×53	25	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK82と重複　SK82新
SK80	8―21･22	円形	59×43	24	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK81･82と重複　SK80新
SK81	8―21･22	楕円形	(198)×162	32	緩やか	南側が窪む	A	大木10	SK80･82と重複　SK81古
SK82	8―21	楕円形	190×114	29	緩やか	凹凸	A	大木10	SK79・80・81と重複
SK83	7―23	円形	49×46	29	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK89と重複　SK83新

（ ）内数字は推定

表3 各 土 拡 一 覧 表（2）

（単位：cm）

土拡番号	地 区 名	上部平面形	規模(長径×短径)	深さ	壁の掘込状態	底面の状態	種別	時 期	備 考
SK89	7－23	円 形	98×(83)	26	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	SK83・100と重複いずれも古
SK91	8－24	円 形	103× 91	42	ほぼ垂直	南側に傾斜	B	大木10	
SK92	8－24・25	楕円形	130× 94	28	ほぼ垂直	平 坦	A	大木9	
SK93	6－23・24	不整円形	136×116	44	ほぼ垂直	中央部凹凸	B	大木10	
SK99	8－25	不整円形	(111)×102	24	ほぼ垂直	凹 凸	A	大木10	
SK100	7－23	楕円形	100× 89	47	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	SK89と重複 SK100新
SK103	8－23	楕円形	114× 94	45	袋 状	平 坦	C	大木10	SD36と重複 SK103新
SK105	6－25	楕円形	109× 75	25	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	SK106と重複 SK105新
SK106	6－25	円 形	120×(88)	21	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	SK105と重複 SK105新
SK107	5－22	円 形	100× 95	25	緩 や か	平 坦	A	大木10	
SK110	3－21	楕円形	103× 89	19	緩 や か	平 坦	A	大木10	SK111と重複 SK110新
SK111	3－21	円 形	(84)×80	16	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	SK110と重複 SK110新
SK112	3－20・21	円 形	(不明)×140	52	ほぼ垂直	平 坦	B	大木10	
SK113	3・4－21	円 形	108× 94	32	緩 や か	平 坦	B	大木10	
SK114	4・5－22	円 形	98×93	18	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	
SK115	4・5－22	円 形	143×141	30	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	SK116と重複 SK115新
SK116	4－22・23	楕円形	148×133	42	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	SK115と重複 SK115新
SK117	4・5－23	不整円形	172×168	31	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	
SK118	3・4－22	楕円形	198×137	21	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	
SK121	3－22	不整円形	151×144	42	ほぼ垂直	平 坦	B	大木10	
SK123	4－24・25	円 形	119×117	41	袋 状	平 坦	C	大木10	ST237と重複 SK123新
SK124	5－24	不整円形	112× 97	51	緩 や か	平 坦	A	大木10	
SK125	5－24	円 形	94×90	20	緩 や か	平 坦	A	大木10	
SK127	4－23	円 形	76×74	30	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	
SK128	4－23	不整円形	57×46	35	袋 状	平 坦	C	大木10	ST237と重複 SK128新
SK129	4・5－23・24	不整円形	104× 93	39	南側袋状	平 坦	C	大木10	ST237と重複 SK129新
SK131	3－24	楕円形	116× 90	39	緩 や か	平 坦	A	大木10	ST237と重複 SK131新
SK134	4－24	円 形	68×63	20	ほぼ垂直	平 坦	A	大木10	ST237と重複 SK134新
SK135	5－25	円 形	104×(72)	46	一部袋状	平 坦	C	大木10	SK137と重複 SK137新
SK136	5－25	円 形	100×(69)	40	東側袋状	平 坦	C	大木10	SK137と重複 SK137新
SK137	5－25	不整円形	162×147	66	西・南側袋状	凹 凸	C	大木10	SK135・136と重複 SK137新
SK140	8－26	不整円形	179×(不明)	40	西側袋状	凹 凸	C	大木10	
SK144	6・7－27	円 形	96×93	35	袋 状	平 坦	C	大木10	
SK145	6－26	円 形	78×69	49	西側袋状	平 坦	C	大木10	
SK147	6－28	円 形	92×70	35	袋 状	東側に傾斜	C	大木10	
SK148	6－28	円 形	(125)×115	33	東・北側袋状	平 坦	C	大木10	SK149と重複 SK149新
SK149	6－28	不整円形	105× 86	43	北側袋状	凹 凸	C	大木10	SK148と重複 SK148古
SK150	7－28・29	円 形	208×204	36	東・西側袋状	平 坦	C	大木10	
SK153	7－27・28	円 形	118× 90	24	緩 や か	平 坦	A	大木10	
SK155	7・8－27・28	楕円形	141×118	24	緩 や か	平 坦	A	大木10	
SK159	7・8－26・27	円 形	100×(98)	20	緩 や か	平 坦	A	大木10	SK160と重複 SK160新
SK160	8－26・27	不整円形	172×137	22	緩 や か	平 坦	A	大木10	SK159と重複 SK159古

（ ）内数字は推定

表4 各土拡一覧表(3)

(単位:cm)

土拡番号	地区名	上部平面形	規模(長径×短径)	深さ	壁の掘込状態	底面の状態	種別	時期	備考
SK161	7・8—25・26	円形	110×100	20	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK175	8—27	円形	100× 83	30	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK177	7・8—28	円形	119×106	25	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK178	8—27・28	不整円形	(167)×(134)	75	南・東側袋状	平坦	C	大木10	SK183と重複 SK183新
SK179	6—29	円形	98×78	32	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK187と重複 SK187古
SK180	6—30	不整円形	120×112	45	東側袋状	平坦	C	大木10	
SK183	8—28	円形	(不明)×(121)	50	東側袋状	平坦	C	大木10	SK78・184と重複 SK184新
SK184	8—28	不整円形	(140)×100	57	西・南側袋状	平坦	C	大木10	SK184と重複 SK184古
SK185	3—25	円形	(不明)× 74	30	ほぼ垂直	凹凸	A	大木10	
SK187	6・7—29	円形	110×(100)	25	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK179と重複 SK179新
SK189	5・6—26	円形	123×118	30	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK191	4・5—26	不整円形	117×100	38	袋状	凹凸	C	大木10	
SK193	4—26	円形	100× 92	42	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK194	5・6—27	円形	(81)× 72	25	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK195と重複 SK195新
SK195	5・6—27	円形	89×75	42	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK194と重複 SK194古
SK198	3・4—27	不整円形	138×118	27	北・西側袋状	平坦	C	大木10	
SK202	5—27	不整円形	90×84	20	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK203	4・5—27	不整円形	(112)×100	28	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK204と重複 SK204新
SK204	4・5—27・28	円形	126×122	34	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK203・207と重複 SK204新
SK205	5—27	楕円形	100× 58	30	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK206と重複 SK206新
SK206	5—27	円形	(64)× 49	25	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK205と重複 SK205古
SK207	4—27・28	円形	92×(不明)	30	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK207と重複 SK207新
SK208	4—27	楕円形	100× 59	21	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK209	4—27	不整円形	156×144	26	北・南側袋状	平坦	C	大木10	
SK210	4—28	不整円形	121×100	43	袋状	平坦	C	大木10	
SK215	3—30	円形	97×95	26	西側袋状	平坦	C	大木10	
SK216	3—29	円形	52×50	25	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK219	4・5—29	円形	147×129	25	ほぼ垂直	平坦	B	大木10	SK220と重複 SK220新
SK220	4・5—29	不整円形	139×127	32	緩やか	平坦	B	大木10	SK219と重複 SK219古
SK221	3—29・30	円形	118×(不明)	30	ほぼ垂直	平坦	B	大木10	SK222と重複 SK222古
SK222	3—29・30	円形	(62)× 51	24	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK221と重複 SK221新
SK224	5—28	楕円形	148×122	50	緩やか	平坦	A	大木10	
SK225	5・6—29	円形	108× 96	25	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	
SK226	5—25・26	円形	100× 85	30	東側袋側	平坦	C	大木10	
SK227	5—30	円形	79×67	35	袋状	平坦	C	大木10	
SK228	4・5—28・29	円形	100× 96	31	東側袋状	平坦	C	大木10	SK229と重複 SK229古
SK229	5—29	円形	(98)× 86	26	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK228と重複 SK228新
SK230	5—28	円形	80×72	34	緩やか	平坦	A	大木10	
SK231	5—29	円形	98×89	43	南側袋状	平坦	C	大木10	
SK236	7—16・17	円形	(84)× 60	38	緩やか	凹凸	B	大木10	SK68と重複 SK68新
SK238	6・7—19	円形	118×100	27	緩やか	平坦	A	大木10	
SK242	8—28	円形	120×102	25	ほぼ垂直	平坦	A		

( ) 内数字は推定

（C）溝　跡　（第4図　図版18）

調査区のほぼ中央部の平坦地、3～8－17～24グリッド内にかけて在り、42号住居跡・44・57・103号土壙と重複している。確認面はIV層上面で、IV層を掘り込んで造られている。遺存状態は、5・6－18・19、7－28グリッドで畑地耕作のため攪乱を受けているほかは、良好である。

溝の幅は、72～153cmで深さ17～28cmである。壁の状態は、全体的に緩るやかに掘り込んでいる。溝の断面形はU字形を示し、底は若干の凹凸がみられ堅く踏みしめられている。長さは直線上で約27mとなり、曲線的にみられるがほぼ南北になり、全体として弧を描くように走っている。出土遺物は土器が24片・フレイク13点出土している。覆土は、黒褐色土で風化礫粒や小礫が多量に含まれ、堅くなっている。

住居跡・土壙と溝跡の新旧関係は、土層の観察により42号住居跡・57・103号土壙より古く、44号土壙より新しい。

時期は、出土した遺物や住居跡・土壙との重複関係からみて、縄文時代中期の大木10式期の所産と考えられる。溝の性格については、現時点では不明である。

2　遺　　物

（a）出土土器片　（図版5～10）

出土した遺物は、整理箱に約48箱を数え、うち土器は42箱である。今回は住居跡や土壙から出土土器片を中心に分類を行なう。分類は、1類土器から11類土器に分類しそれぞれの表出された技法および文様別に類別した。なお縄文の原体については、施文された方向で書き表わすことにした。

1類土器（図版5　1～17）

文様は渦巻文を主体に描き出している。

1a類　地文は縦方向に施されるRLの単節縄文が施文され、沈線によって渦巻文が描き出され、いずれも小形の深鉢形土器になる。

1b類（1～17）

隆帯によって渦巻文が口縁部から胴中半部まで描出されている。隆起線は全体に研磨・調整され、隆起線の両縁は沈線が施されている。器形は、キャリパー形を示す深鉢形土器になる。口縁はその大半が波状口縁となり（1・4～6・11・17）、口唇部付近から渦巻文がみられる。口縁部から胴部にかけては、隆起線と沈線で区画され円文や楕円文として描かれている（7・9・13）。胴下半分から底辺にかけては、隆越線が調整され沈線で縦位に

区画されている。区画された中に刺突（10）・列点（11）・細線（5）が施されるものもある。地文は、縦位方向の単節・複節縄文で、胴下半分で磨消されている。

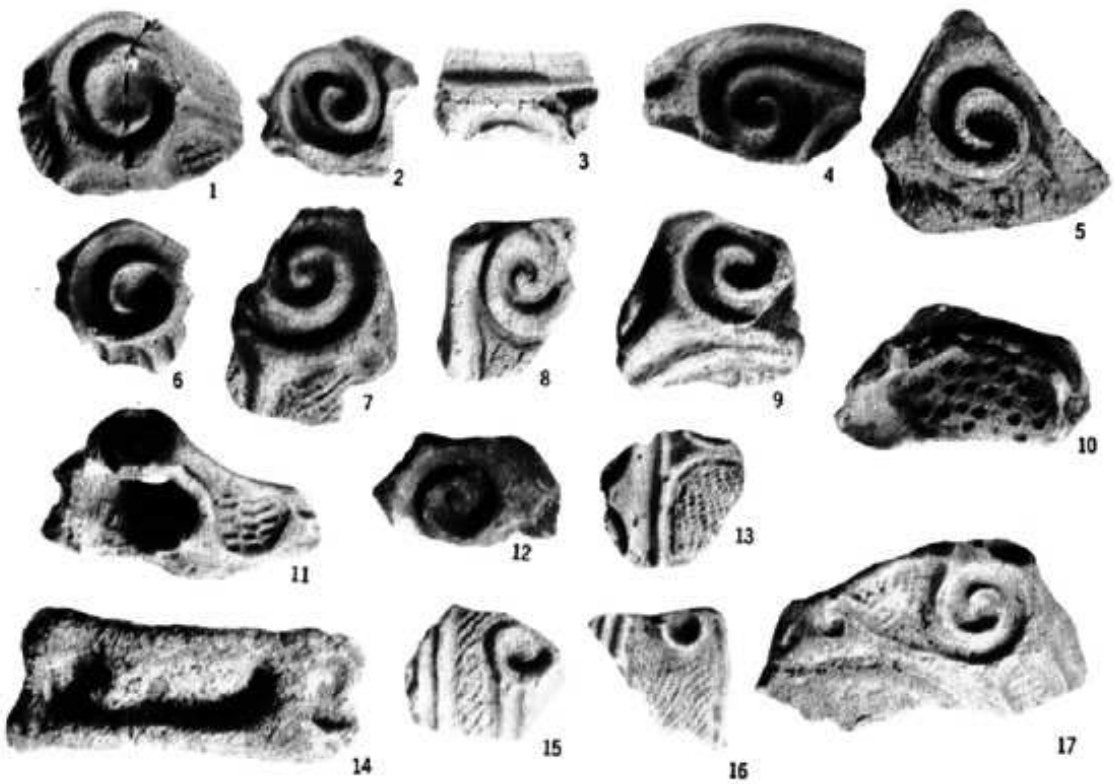
2類土器（図版6　1～17）

1b類の文様を引き継いでいるが、渦巻文が口縁付近にのみ描かれ、文様の主体が円文・楕円文となり、文様構成は縦方向の区画帯となる。隆起線が退化し、粘土帯・紐を貼り付け上面を良く研磨し、断面が三角形・半円形状となり、区画された内側縁は沈線が施されている。口縁は平縁（1）波状（4）となるものがある。胴部中半部から下部にかけて沈線による区画となる。地文は、縦方向の単節縄文で、胴下半部で磨消されている。(16・17)は、渦巻がS字状に横位になる。

3類土器（図版6　18～27）

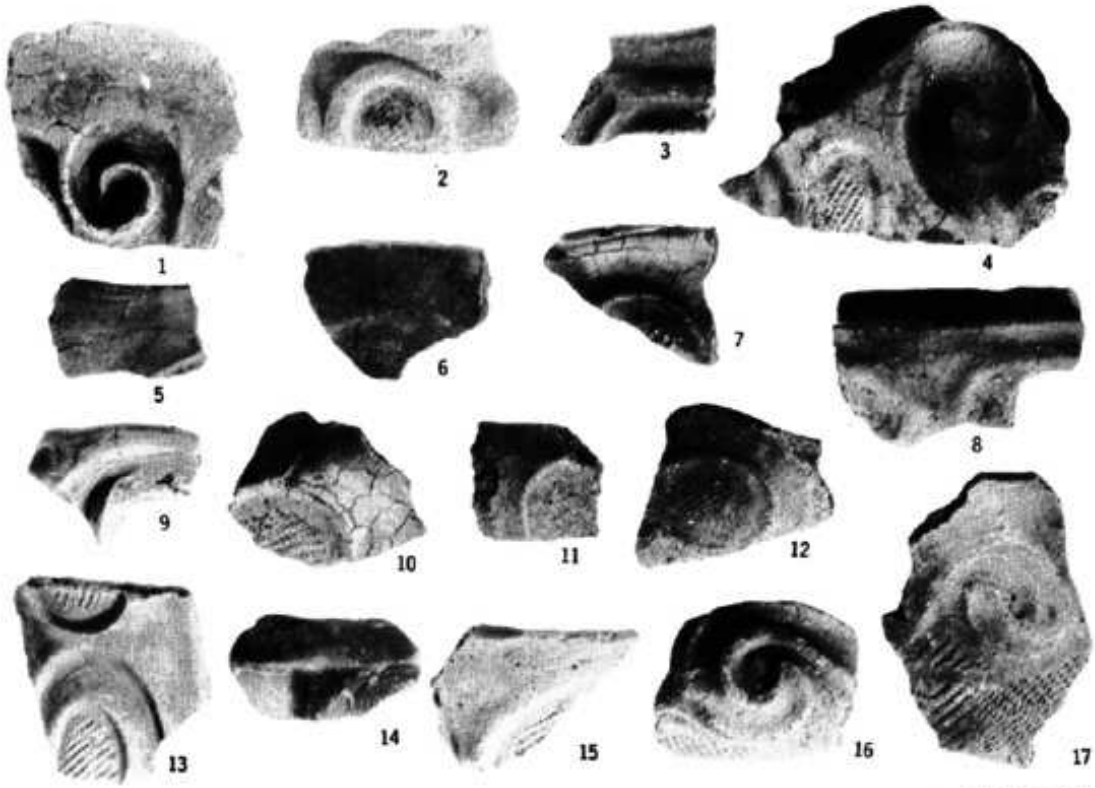
1～3本の沈線によって区画され、文様の主体が楕円文を描出し、文様構成は縦位の区画帯となる。器形はキャリパー形の深鉢形土器で、最大径が胴中半部にある。口縁は平縁になる（18～20）と波状を示す（21）とがある。楕円文は胴中半部まで描出され（22～24）、胴下半部では底部へ斜行するように区画している(27)。地文は、縦・斜位に単節縄文RL・LRを施し、磨消縄文となっている。

図版5

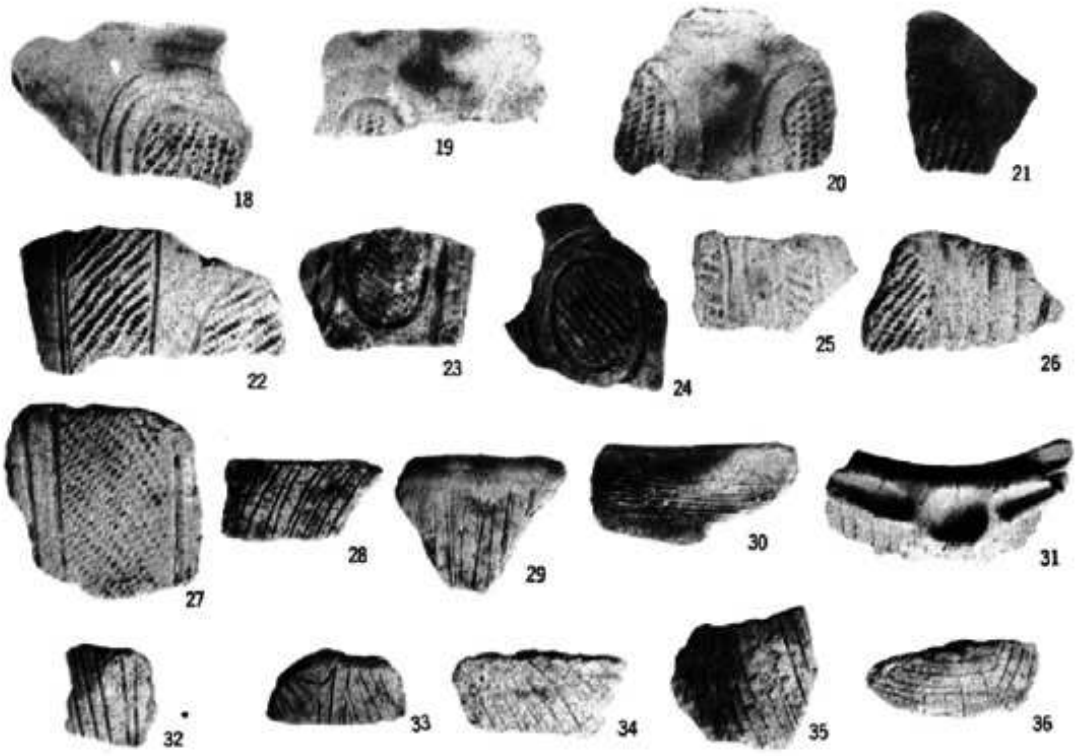


1類土器群

図版 6



2類土器群



3・4類土器群

4類土器（図版6　28～36）

ヘラ状工具の先端を用い、条線・細線の集合体を描き、直線・綾形・格子目状文になり（30）は、横位方向に走り口唇付近が磨消されている。

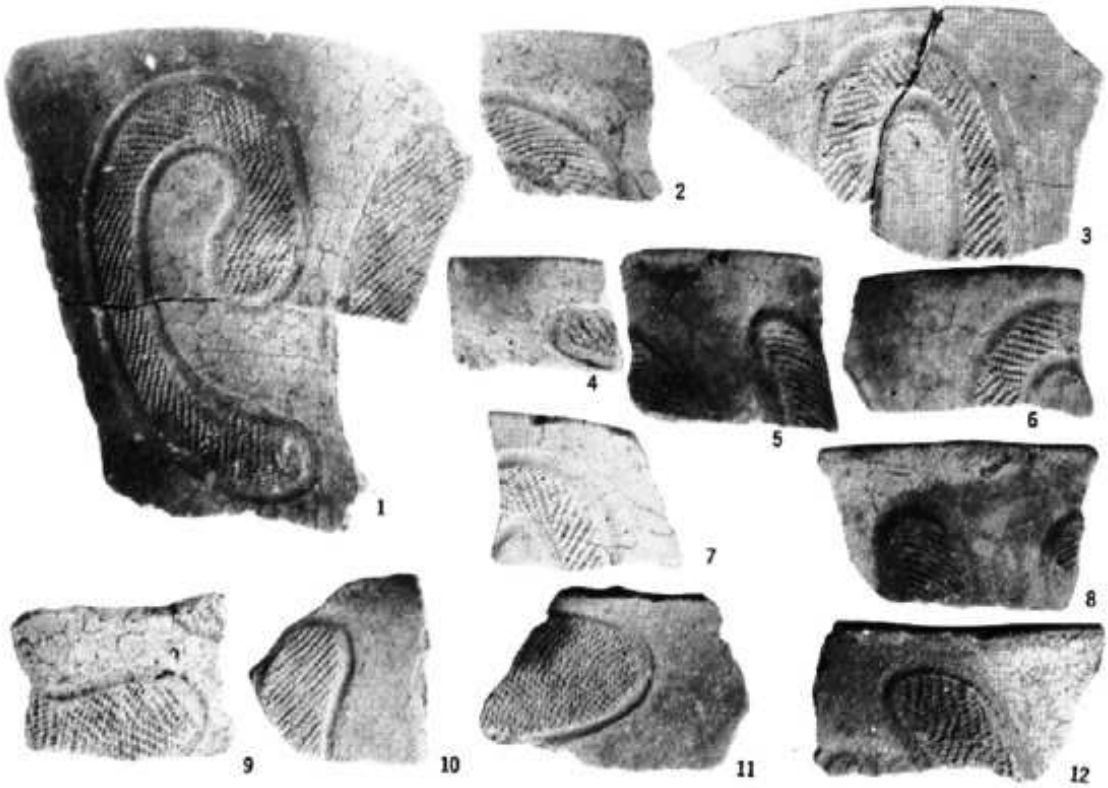
5類土器（図版7　1～12）

器形は、胴中半部に脹らみをもつキャリパー形の深鉢形土器である。文様はC字状文やS字状文が縦位に描出され、文様構成は縦方向の区画帯となり、横に連続しており、口縁部から胴中半部まで描かかれている。口縁は小波状口縁（1・3・6）となっている。縄文の施文はいずれもLRの原体を使用し、充塡されている。他は研磨・調整されている。

6類土器（図版8　1～12）

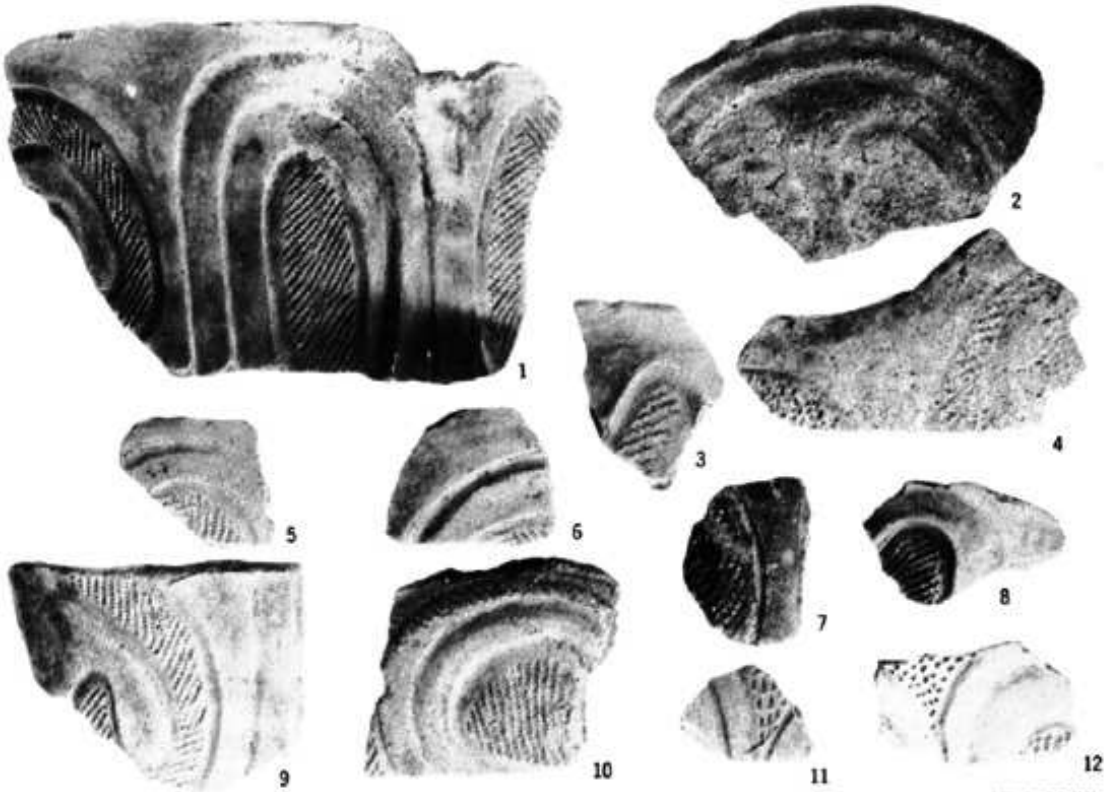
器形は深鉢形（1・3・5・6）で、浅鉢形は（2・4・10・12）である。粘土帯を貼り付け上面を良く研磨し、断面が三角状にえぐりこんだもの（1・3・5・8・9）や半円形状（2・4・10・12）などがある。文様はS字状文・楕円文が縦位に描出される（1・9）や、渦巻文が変形したS字状文が横位になるもの（2・4・10～12）とがあり、前者は縦方向の区画帯で後者は横方向の区画帯で、それぞれ連続して文様構成を示している。縄の施文は、LRの原体を用い充塡されている。（11・12）は区画外に、ヘラ状工具の先端

図版7

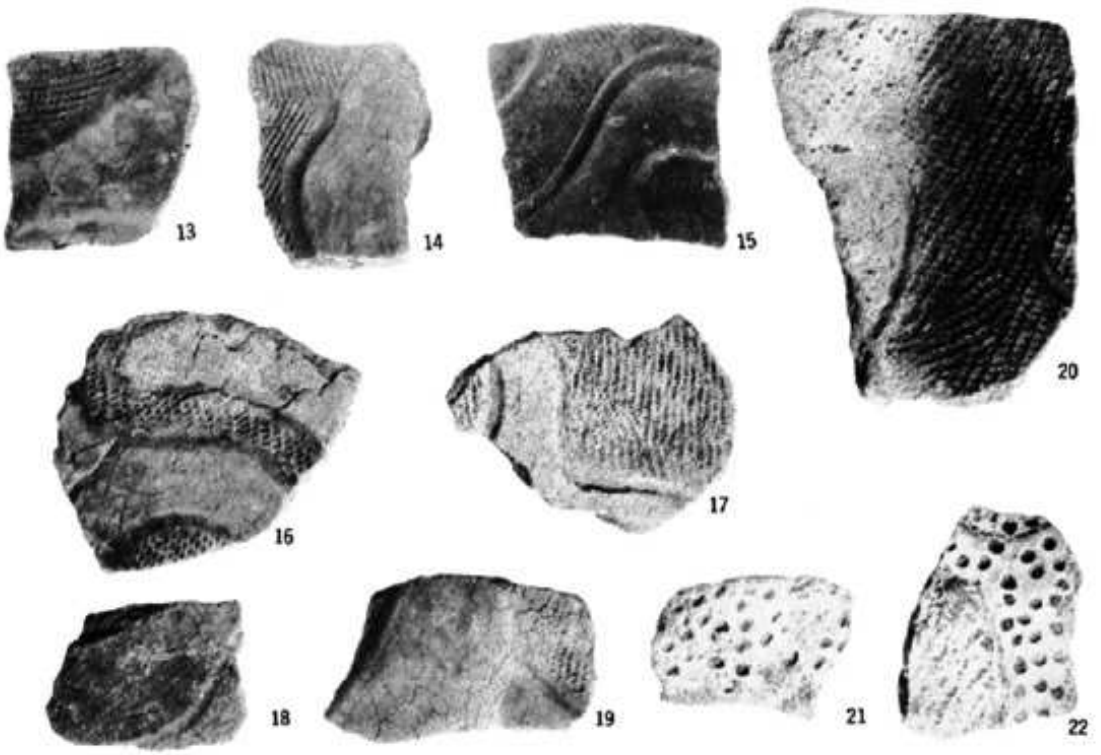


5類土器群

図版 8



6 類土器群



7 類土器群

で連続に刺突されている。

7類土器（図版8　13～22）

5・6類でみられた縦や横方向の区画された単独のS字状文がくずれ、口縁から胴中下半部にかけて、斜状方向ないし横方向にS字状文が連結して、曲線的に描き出されている。やや太い沈線で施されるもの（14・15・18）や、帯状の粘土を貼り付け良く研磨しているものは（13・16・18・19）とがある。(20）は隆帯の上に縄文を施し、(21・22）は棒状工具の先端で連続して刺突している。いずれも縄文は、充填されている。

8類土器（図版9　1～11）

2～5cmの隆帯を良く研磨し両縁が微隆状になり、器形は深鉢形土器で最大径が胴下半部にあり、文様構成は7類土器でみられたS字状が発展し、隆帯が曲線的に横走し、文様帯は胴中半までみられ、胴下半部は縄文帯となり(2)、充填縄文を主体とするグループである。区画された隆帯の内側にやや太い沈線が施されている。

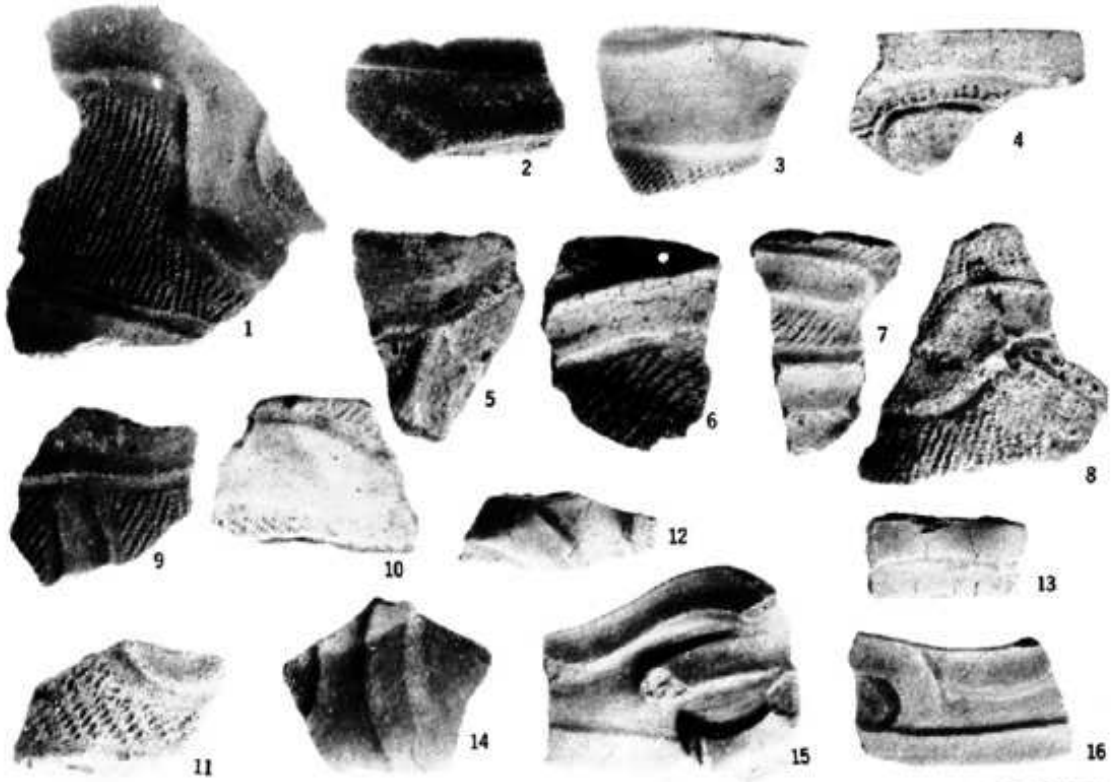
9類土器（図版10　1～16）

9a類土器（1～11）

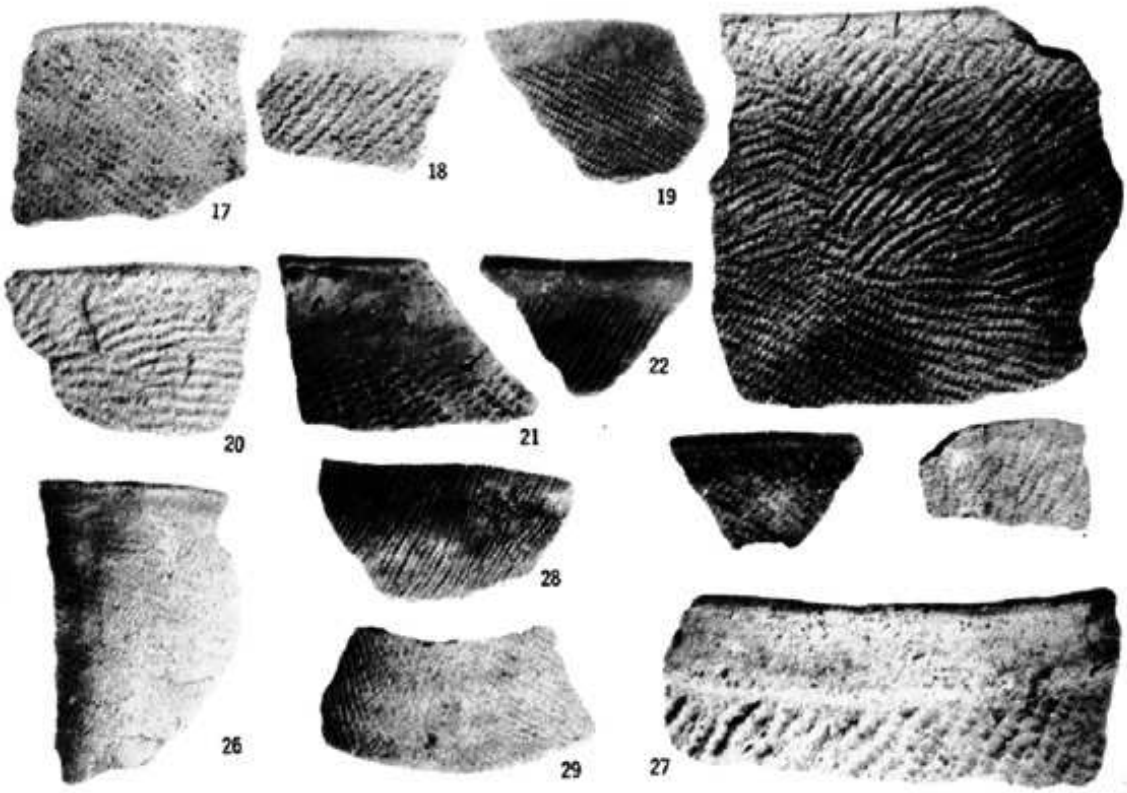
8類土器の文様構成・施文技法に類似し隆帯が曲線的に横走しているが、（1・5・8・

図版9

8類土器群



9類土器群



10類土器群

9）でみられるように隆帯が縦走し、直線的な手法がみられる。（6）には、補修孔がみられる。文様帯は、口縁から胴中半まで描かれ、胴下半は縄文帯となっている。充填縄文が主体となっている。(11)は小形の深鉢形土器の底部である。

9 b類土器（12～16）

器形が浅鉢形を呈する。2～2.5cmのやや細い隆帯を施し、丁寧に研磨・調整をおこない、両縁が微隆起状になっている。口縁は波状になり、文様は曲線的に横走し、横位の区画帯がみられる（15・16）。胴部の文様は、さらに曲線的になり隆帯に区画され、内側に充填縄文が施されている。

10類土器（図版10　17～27）

地文は単節縄文が器面全体に施されている。器形は、(19）で浅鉢形・(29）で台付土器になるほかは、粗製深形土器を呈する。縄文の施文は、口唇直下より施すものは（17・20・23・26）で口唇部が外反しており、（18・19・21・22・24・25）は口縁付近1.5～5cmの幅で磨消がみられ、一条のやや太めの沈線が施されているもの(27)がある。(28)は胴部破片でＬＲの附加縄文が施されている。(23)は横方向と斜方向になる羽状に縄文を施しており、ＬＲの原体を用いている。

土製品・土偶（第16図10　図版26）

長身5.7cm・短身5.5cm・厚さ1.4cmで暗褐色を呈し、胴部中半以下が欠損している。文様はへら状工具の先端を使用し、細線によって描いており、胸部表（a）は左から右へ・裏（b）では右から左へ横走するように施す。胴下半部では、縦・斜走するように描出している。

（b）完形・一括土器　（第13図　図版26）

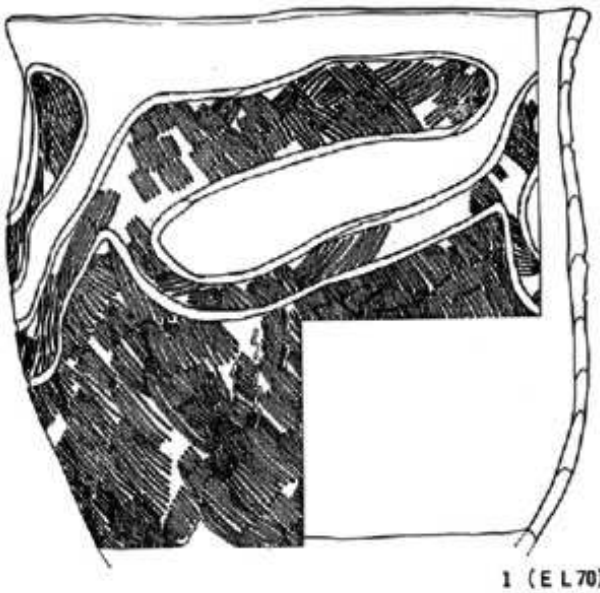
5類土器に共通する（図版26—02）

器形は、大形の深鉢形を呈し、胴中半部が膨らむキャリパーである。現存高約26cm・口径42cmである。文様構成は、口縁から頸部にかけＳ字状文と楕円文で構成されそれぞれ連結され、横位に展開される。胴中半部は、おそらくＣ字状文が描出される。

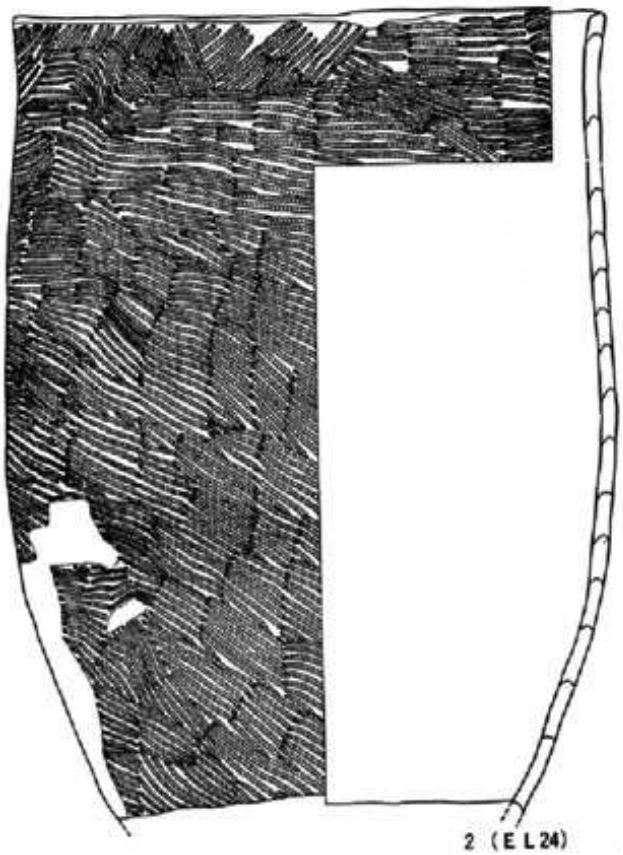
6類土器に共通する（図版26—04・06）

(06)　図版26—07と共伴する、深鉢形を呈し、口径約38cmである。文様構成は、楕円文とＣ字状文とで構成され、縦位方向の文様が割り付けとなっている。縄文原体はＬＲの複節縄文で充填されている。

(04)　図版26—08・09と共伴する。深鉢形を呈し、胴中半部のみで出土する。隆起帯によって区画され、Ｓ字状文が縦位方向に施され、連続して横位方向に走る。縄文原体はＲＬの単節縄文で、充填されている。



1（EL70）



2（EL24）

0　10cm

第13図　土器実測図

7類土器に共通する（第13図1　図版26—07）

図版26—06と共伴する。器形は、中形の深鉢形土器で胴上半部が膨らみ、口縁が若干外反している。胴下半部が欠損している。現存高26.5cm・口径29cm・器壁厚0.6～0.8cmである。隆帯を良く研磨・調整し、やや太い沈線で区画されている。文様は、口縁から胴上半部に描かれ、S字状文が横方向に展開している。区画された中は、充填縄文がみられる。胴中半以下は縄文帯となっている。縄文原体はLRの附加縄文となっている。器面全体はよく整形され、焼成もよい土器であるが、複式炉（EL70）の埋設土器として使用されたため二次焼成を受けている。

8類土器に共通する（図版26—05・08）

（05）　胴中半部のみ現存する土器で、深鉢形土器で胴中半下部に膨らみをもっている。隆帯の両縁が微隆起状になり、隆帯で文様が構成され、曲線的に横走している。文様帯は口縁から胴中半まで描出され、胴下半で縄文帯となっている。隆帯の両縁は、やや太い沈線で施され、LRの単節縄文が充填されている。

（08）　図版26—09と共伴し、（09）の口縁部付近の外側にめぐっていたものである。胴中半以下が欠損する深鉢形土器である。隆帯の両縁がよく隆起して、隆帯で区画され縄文の充填された部分が文様として描き出され、S字状文がやや縦方向に走っている。全体的な文様構成は、横走するように曲線的に描かれている。文様帯は、口縁部から胴中半までみられ、胴下半は縄文帯となっている。縄文原体は、LRの複節縄文となっている。器面全体は良く整形され、口縁部から胴上半部にかけてはとくに調整・研磨され、焼成も良く堅い土器である。若干二次焼成を受けている。

9類土器に共通する（図版26—03）

器形は小形の深鉢形を呈し、胴中半部から底部のみ現存する。径16cm・底径6cm・器壁厚0.6cmである。胴中半部まで、隆帯による曲線的な文様が描出され、隆帯がやや縦方向になり、曲線的な文様が連結されている。胴下半部は縄文帯となる。隆帯で区画された部分は沈線が施され、縄文が充填されている。縄文原体はRLの附加縄文が施されている。

10類土器に共通する（第13図の2　図版26—09）

図版26—04・08と共伴し、図版10—23と同一個体である。器形は、大形の深鉢形を呈し、口唇部がやや外反し、胴中下半部に膨らみをもっている。胴下半部が欠損し、現存高40cm・口径29.5cm・器厚0.6～0.8cmを計る。器面全体にLRの単節縄文を口唇直下から施しており、口縁部から頸部にかけては横方向と斜方向に縄文を施し、羽状縄文となっている。胴中半部から下半部にかけては斜方向に施している。焼成もよく堅い土器であるが、器面裏側は二次焼成を受けている。

（b）出土石器　（第14～16図　図版27・28）

1次調査では平箱にして6個分の石器が出土した。その大半は土壙などの遺構の覆土に含まれていた。石鏃・石錐・尖頭器・打製石斧・篦状石器・スクレーパーなどの打製石器と、磨製石斧・凹石・磨石・石皿・石棒の磨製石器・礫石器があり、後二者は全部合わせても15点と少なく、量的には打製石器が圧倒的に多く、なかでも剥片・砕片がその大半を占める。石材は、打製石器では数点の玉髄質を除けば頁岩が用いられ、磨製石器・礫石器には、凝灰岩、花崗岩、砂岩が用いられている。

ＳＴ2の柱穴にあたるＥＰ1や、ＳＫ178、ＳＫ204の覆土から、それぞれ同一母岩の剥片・石核が大量に検出され、接合して原礫に近い状態にまで復元できたものもある。これらの資料から、原材は人頭大の転石であることが知られ、打面の一定しない剥離作業によって剥片を生産していることが観察される。剥片は縦長・横長・縦横ほぼ同じ長さをもつものの三者がみられるが、石器の素材としては、縦長剥片が圧倒的に多いという特徴をもつ。縦長剥片のなかには、背面に2本以上の平行する稜をもつ〝石刃〟状のものもみられ、スクレーパーに多用される傾向をもつ。これらが組織的手法によって生産された証拠はないが、本遺跡とほぼ同じ時期と考えられる向原遺跡（西方約2.5km）からは、縦長剥片と、その石核が大量に出土している（註）ことを考慮すれば、縄文時代中期末葉の当地域で一時的に、縦長剥片の連続剥離技法があった可能性が高い。

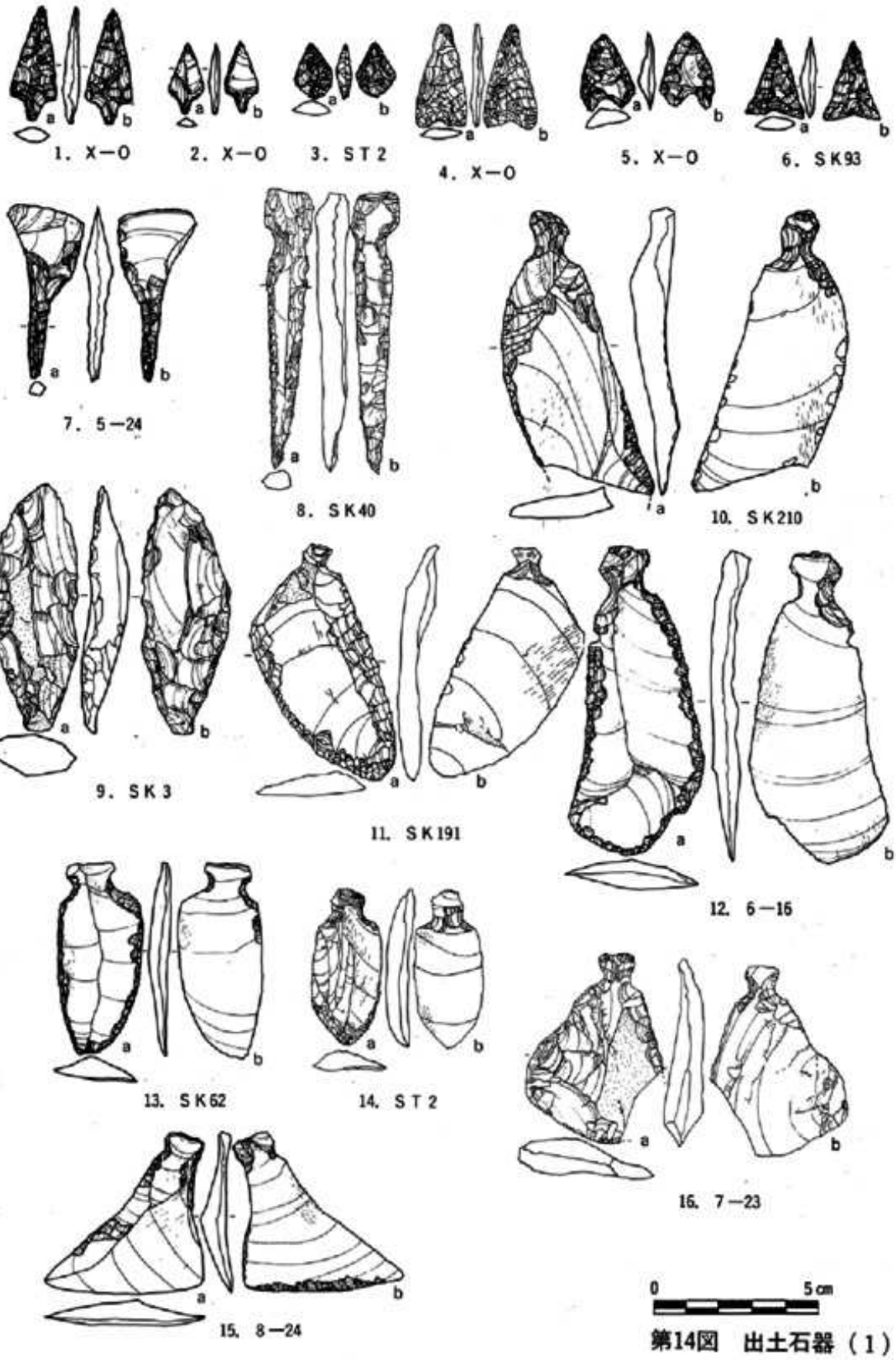
以下、各器種ごとに記述するが、加工痕ある剥片・剥片・石核については、詳細な観察ができなかったことから、今回の報告では割愛することにする。

石　鏃（第14図1～6　図版27）

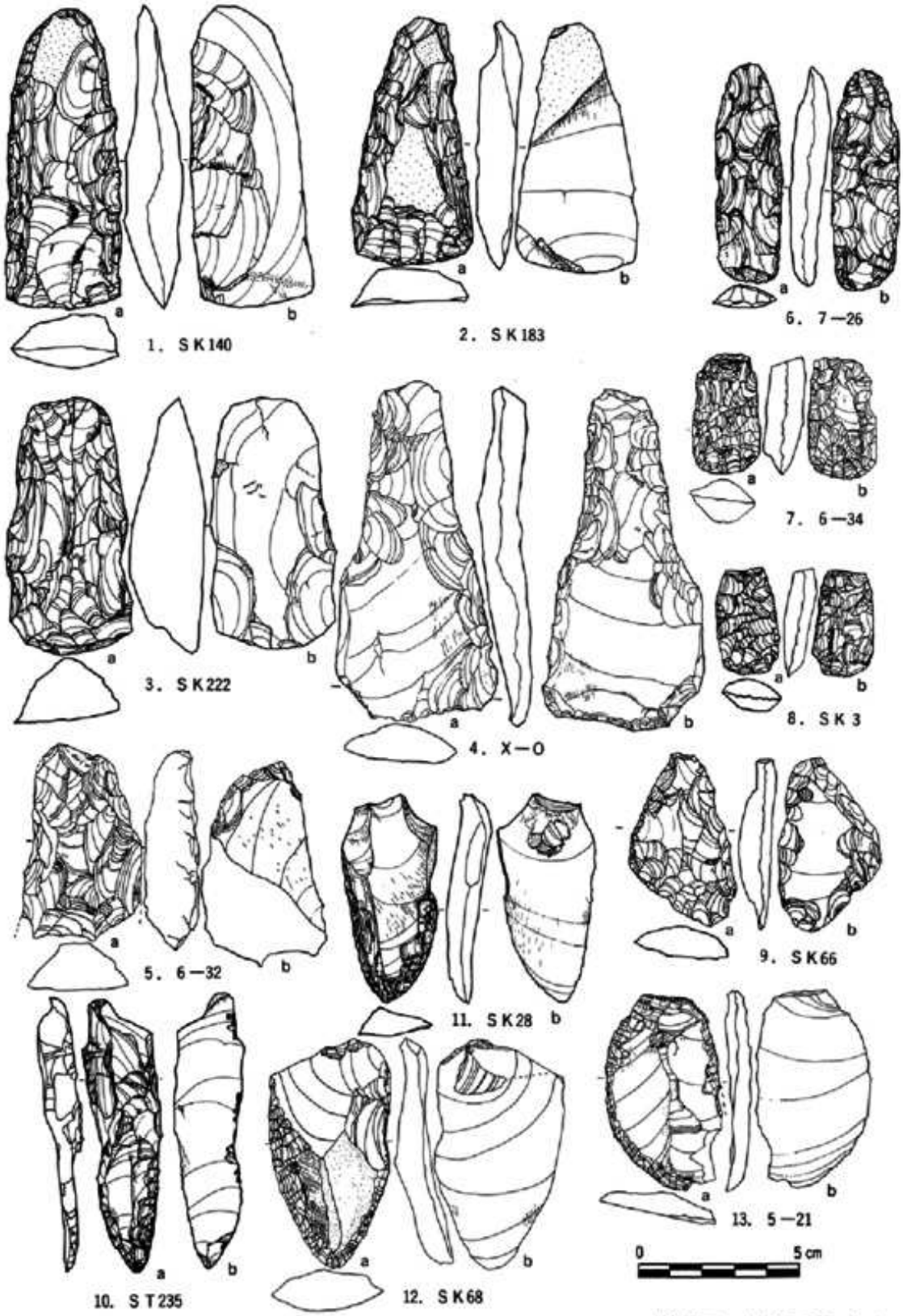
6点出土し、うち4点は重機の排土中から発見された。1～3は有茎鏃、4～6は無茎鏃である。1の尖頭部の最終加工はａ面左側・ｂ面左側でいずれも基部側から先端部に向う。2は小剥片の周辺に微細な加工を施したもので先端部は錯向剥離で仕上げている。3は基部のつくりが明りょうでなく菱形を呈する。4は二等辺三角形を呈し、両側縁とも直線的で浅い抉りをもつ。5は両側縁が湾曲し最大幅は尖頭部と脚部の境にある。6は下端に最大幅をもち、両側縁は尖頭部で直線的であるが脚部で外反し、浅い抉りをもつ。

石　錐（第14図7～8　図版27）

5点出土している。7は尖頭部とつまみ部の長さがほぼ等しく、尖頭部の断面は中央部で菱形、先端部では三角形に近い。先端部は欠損している。8は石匙のようなつまみをもつ細長い資料で、先端部は数回の樋状剥離によって形成され、ネジ山のような印象を受ける。なお、この部分は磨耗による光沢が認められる。他に3点の石錐が出土しており、2


1. X−0
2. X−0
3. ST 2
4. X−0
5. X−0
6. SK93
7. 5−24
8. SK40
9. SK 3
10. SK210
11. SK191
12. 6−16
13. SK62
14. ST 2
15. 8−24
16. 7−23
0
5cm

第14図　出土石器（1）


1. SK140
2. SK183
6. 7—26
3. SK222
4. X—O
7. 6—34
8. SK3
5. 6—32
11. SK28
9. SK66
10. ST235
12. SK68
13. 5—21
0
5cm

第15図　出土石器（2）

点は7に似た棒状の資料で、1点は柳葉形で薄い資料である。

尖頭器（第14図9　図版27）

1点だけの出土で横長剝片を素材としている。a面に自然面を残し、全体的に粗いつくりで先端部加工は顕著でない。

石　匙（第14図9～16　図版27）

11点の出土でうち3点は包含層から、8点は遺構内から検出された。15・16を除いた9点は縦形の石匙で、10・16と図示していない2点を除く7点は完形である。

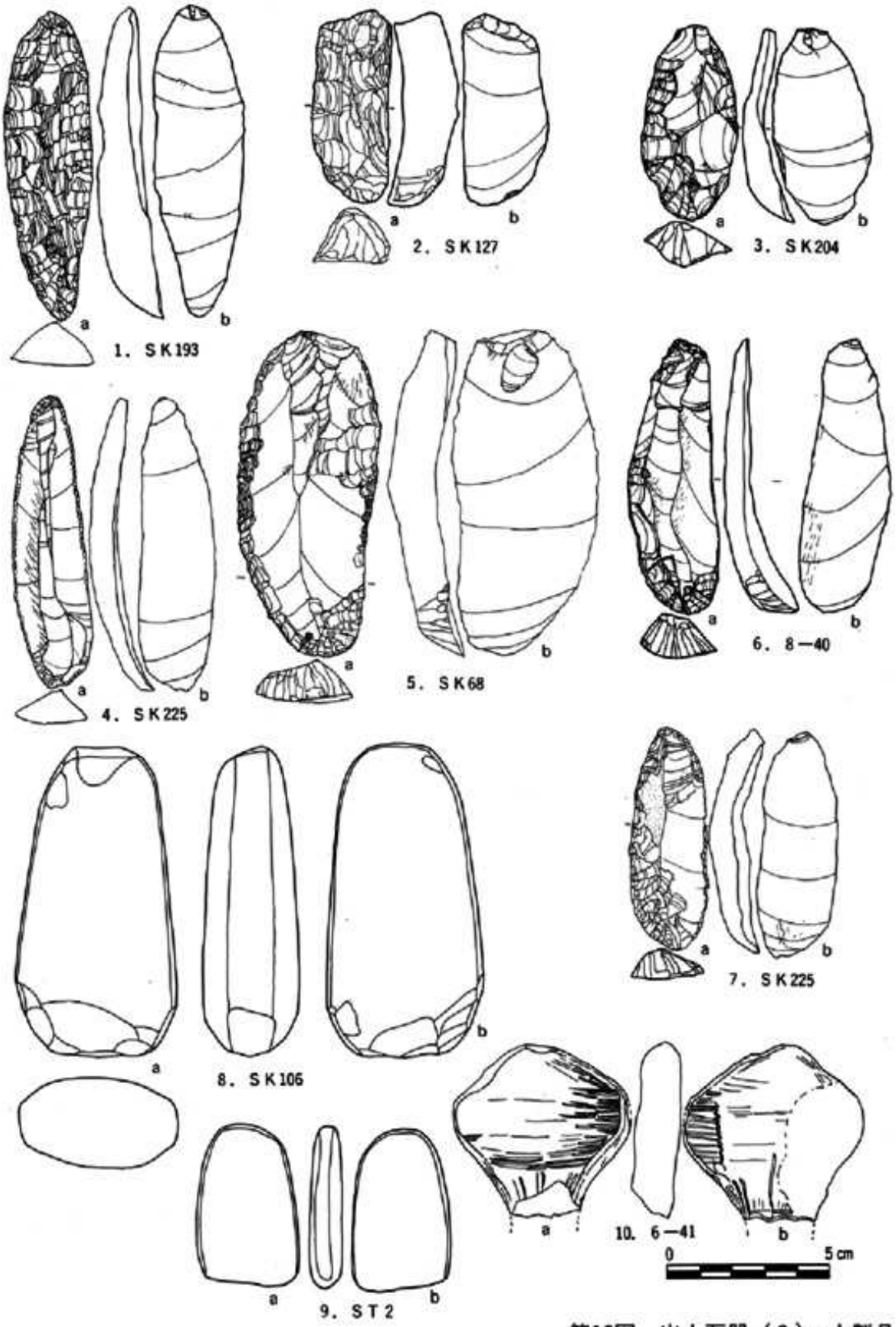
10は縦長剝片の基部をつまみ部につくりあげておりa面左側と右側下部に刃部形成の剝離がみられ、左側中央と右側下部の縦縞状の剝離は美事である。b面左の中央部から下部にかけて光沢が認められる。11は縦長剝片の末端につまみをつくりあげたものでa面のほぼ全周に調整加工がある。10と同様b面右に光沢が認められる。12は縦長剝片の基部をつまみとして全周に調整加工を施した石匙でa面右側とb面左側の中央部に光沢が認められる。13は折断した縦長剝片の下半部を素材とし、その上部につまみをつくりだし 全周に微細な調整加工を施している。14は小型の縦長剝片の基部をつまみとし、両側縁下端に調整加工がみられる。a面左側下端は急傾斜な加工でスクレーパーⅠ類の刃部に類似する。15は末端の広い薄手の剝片を素材としa面左側の一部と、b面末端に調整加工がある。本次調査では唯一の腹面加工のある石匙である。16は横長剝片の右端をつまみにつくりあげたものでa面左側と下端に調整加工が認められる。

打製石斧（第15図1～5　図版27）

6点出土した。4を除けばいずれも片刃で短冊形の石斧である。1は横長剝片と素材とし腹面加工によって打瘤を除去した後、両側縁に急傾斜な調整加工を施し、最後に先端部に加工を施している。先端部加工の末端部に最大厚をもつ。b面下部に光沢が認められる。2はb面下方に陰瘤のある薄い石核を素材とし、1と同様側縁加工の後、先端部を加工している。中央部に最大厚がある。3は厚手の横長剝片を素材とし、両側縁に急傾斜な調整加工をもつ。上下両端に中央に向う調整加工があり、刃部は上端の可能性もある。4は薄手の縦長剝片を素材とし、上半部の両側縁に深い調整剝離を施して基部を作出している。刃部はa面からb面への急角度の剝離痕がみられるが、使用による刃こぼれの可能性が高い。b面上部と中央部に光沢がみられる。5は先端部が折損する資料である。

篦状石器（第15図6～9　図版27）

完形品3点と未成品2点の出土をみた。完形品3点はいずれも完全な両面加工で短冊状を呈し、先端に樋状剝離がみられる。6は7・8にくらべ粗いつくりで、先端部は急傾斜で片刃状である。7・8はともに小型の資料で折断された剝片を素材としており、上端に



第16図　出土石器（3）・土製品

は、折れ面が残っている。いずれも両刃状の先端部をもち、横断面は凸レンズ状を呈する。

スクレーパー（第15図11—13　第16図1～7）

剝片の側縁や末端に調整加工を施して刃部を形成する石器を一括して、スクレーパーとした。16点の出土があり、うち12点は遺構内から検出された。これらはすべて片面加工で、刃部を形成する調整加工の部位や、刃部形態の差からⅠ～Ⅲ類に分けられる。

Ⅰ類は縦長剝片の両側縁に調整加工を施し、一方の末端を尖らす一群で4点がこれに属する（第15図10～11　他1）。10は縦長剝片の基部に加工を施して刃部を形成したもので、11・12は割合幅広の剝片の末端部を刃部につくりあげている。11・12の先端は樋状剝離がみられる。

Ⅱ類は〝石刃〟状の縦長剝片を素材として、先端部に急傾斜をもつ樋状剝離によって弧状の刃部を形成する一群で、側縁加工が背面全体に及ぶⅡa類（第16図1・2）、と側縁加工が縁辺部に限られるⅡb類（3～7）に細分できる。すべて内湾する剝片末端部を刃部につくりあげており、腹面との角度は45°～60°をはかる。1は両端に刃部をもつ。

Ⅲ類は剝片の縁辺部に浅い連続的な調整加工を施した一群で3点がこれに属する。第15図13は剝片の全周に加工がみられる。他に一側縁加工が1点、両側縁加工が1点ある。

磨製石斧（第16図8　図版27）

SK106から出土した1点だけで折損後、敲石として再利用され、両端に敲打痕がある。

凹　石（図版28）

遺構内3点、包含層のうち2点は拳大の転石を利用し、両面に1～2個の凹みをもつ。4点は大型で扁平な砂岩の片面あるいは両面に5個前後の凹みをもつ。

磨　石（第16図9　図版27・28）

5点出土している。9は扁平な小礫の側縁と上端を面とりしたもので、a・b面とも横方向に走る擦痕がある。小型磨製石斧の未成品の可能性がある。他の4点は拳大の円礫の一部に磨面をもつ。いずれも土壙内から検出されている。

石　皿（図版28）

SK209から1点だけ出土した。25×20cmの砂岩製で、表面中央部に浅い磨面をもつ。裏面は平坦に磨かれており安定している。

石　棒（図版28）

ST2と、SK146から各1点が出土し、両者とも折損している。一辺7cmの角柱状と、直径8cmの円柱状のもので、いずれも研磨によって整形されている。

註　寒河江高校社会部「研究集録第6号—石田・向原・長岡山出土品篇」1969 他

V　ま　と　め

今回発掘調査したうぐいす沢遺跡は、村山平野の南西部に位置し、最上川の右岸の河岸段丘の上段微高地に立地し、縄文時代中期の中葉から末葉にかけての集落跡である。本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡８（検出６・柱穴および炉跡２）・土壙129・溝跡１・不明ピット259・不明遺構２であり、出土した遺物は整理箱に約48箱である。

今回は、一般県道中山左沢線の道路改良事業バイパス工事に伴う緊急発掘調査で第１次調査となり、昭和56年度には新たに、遺跡北西端の区域に新規道路・取り付け道路工事が着工することになるため、山形県教育委員会では関係機関と協議のうえ、昭和56年度中に第２次調査を予定している。よって今回の報告書は、遺構・遺物について概括的にまとめたものである。

（１）遺構について

住居跡の構成・配置は、調査区の南東側の傾斜地と平坦地に２・25・26・234・235号住居跡・13号住居跡・42号住居跡が多く密集して在り、北西側の緩傾斜に237号住居跡が位置し、調査区の中央部の平坦地や緩傾地には、今回の調査では認められない。住居跡の分布は、地形を考慮して南西側の傾斜地に集中し、北側区域へ延びると考えられる。

住居跡の構造は、平面形が隅丸方形・多角形・楕円形を呈し、２・25号住居は複式炉の側に２本の大形の主柱穴が位置し、住居跡壁際に間隔をもって支柱穴があり、壁コーナーにそれぞれ壁柱穴がみられる。その他13・237号住居跡も同様な構造がみられる。炉跡は、いずれも複式あるいは複々式の形態を有し、二次使用また再使用といった新旧の住居跡の使われ方によっている。炉の位置は、いずれも住居跡の壁際にあり、住居跡に占る面積はあまり多くなく、小規模になる傾向がある。住居跡の時期は、いずれもが縄文中期大木10式期の所産のものである。

土壙は、調査の全体に亘って分布しているが、中央部の平坦地から北西側の緩傾地に最も多く集中している。形態は、大きく３タイプに分類され、Ａタイプが75、Ｂタイプが25、Ｃタイプ31の割合になり、Ａタイプの土壙の割合が多い、それぞれの分布状態は、Ａタイプは、調査区全体にみられるが南西側と北西側に多くみられ、Ｂタイプでは調査の中央部の平坦に集中し、Ｃタイプは北西側の緩傾斜地に多く密集している。

土壙の時期は、３号土壙・50号土壙・91号土壙が縄文時代中期大木９式期に属する他は、すべて大木10式期の所産であり、一時期に分布し集中するのが特徴である。

土壙の性格は、Ａタイプについては性格は不明であり、Ｂタイプは土壙の堆積状態から

みて墓壙とみられ、Cタイプでは袋状土壙となるのが特徴で貯蔵用の施設と考えられる。

溝跡（SD36）は、ほぼ南北に弧状をなすように走り、土層の堆積状態は風化した礫粒が多量に混じり、堅く踏みしめられている。現段階では性格が不明である。

（2）遺物について

出土した土器は、1類土器から10類土器まで描出された文様や施文技法によって、概括的に分類した。分類した土器の時期は次の通りである。

1類土器は、渦巻文を主体として器面全体にみられ、1a類は縄文時代中期大木8b式に比定され、1b類は大木9a式に比定される。

2類土器は、1b類の文様を引き継ぎ、渦巻文が口縁部のみにみられ、文様構成の主体が円、楕円文の縦方向の区画になる。3類土器は楕円文を区画とすり磨消縄文が主体となる、4類土器はヘラ状工具の先端を用いて細線が施されている。2～4類土器は、いずれも縄文時代中期大木9b式に比定される。

5類土器は、S字状文やC字状文が縦方向に施され充填縄文がみられる。6類土器は、隆起帯による区画でS字状文・楕円文が縦・横方向に走り、連続している。7類土器は、S字状文が発展して、曲線的に横方向に連続した文様が描かれている。5～7類土器の時期は、縄文時代中期大木10式に比定されている。

8類土器・9類土器は、粘土帯を良く研磨・調整し両縁が微隆起になり、隆帯による区画や沈線を施して区画する文様は、さらにS字状文が発展し、曲線的に縦・横走している。胴上半部が充填縄文となる一群であり、時期は縄文時代中期大木10式に比定される。

10類土器は、2類土器から9類土器に伴う、粗製深鉢形土器や浅鉢形や台付土器となる。

以上のように、文様系統の変遷については、S字状文から派生してくる渦巻文の変化やさらに系統が引き継れる楕円文の変化、S字状文の変遷が今後の検討課題となるであろう。

出土した石器は、整理箱に約6箱出土し、量的には打製石斧が多く出土している。その他、2号住居跡の柱穴や178・204号土壙の覆土中から、同一母岩の剝片や石核が大量に出土している。打製石斧や石匙の裏面に光沢が認められるものが出土している。この時期に最も多く出土する磨石や凹石あるいは石皿の量が少いのが特徴である。出土した石器の時期は、明確に判断できないが縄文時代中期大木9式から10式期にかけての時期である。

このようにうぐいす沢遺跡の集落構成は、山形県内でも代表的な東根市小林遺跡・山形市熊の前遺跡・長井市長者屋敷遺跡などと比較してみると、遺跡の立地や集落構成の相異がみられ、縄文時代中期の集落を解明するうえで、今後の課題となるものである。

遺跡全景（W↑）

精査区全景（NW↑）

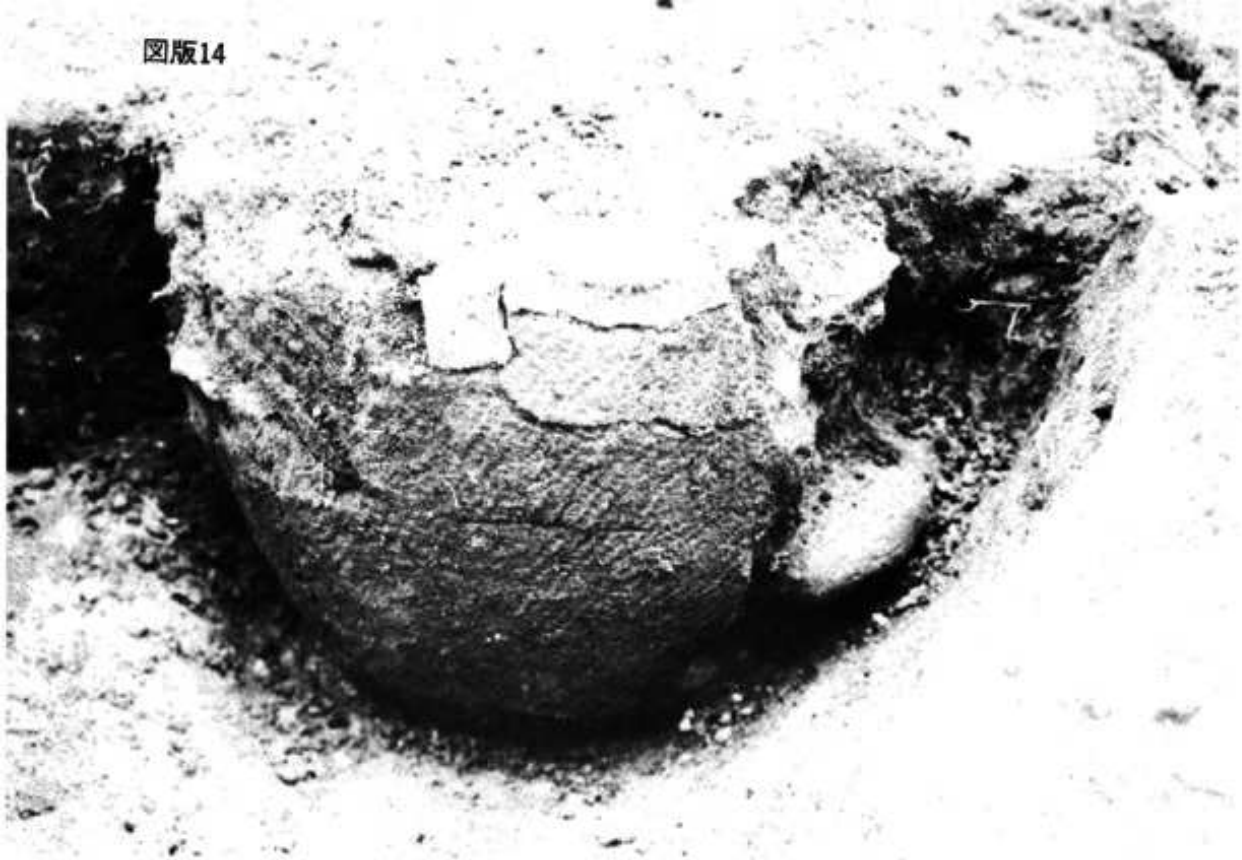
2・25・26・234・235号住居跡全景（ＳＥ↑）

2・25・26・234・235号住居跡全景（Ｅ↑）

EL24近接（SE↑）

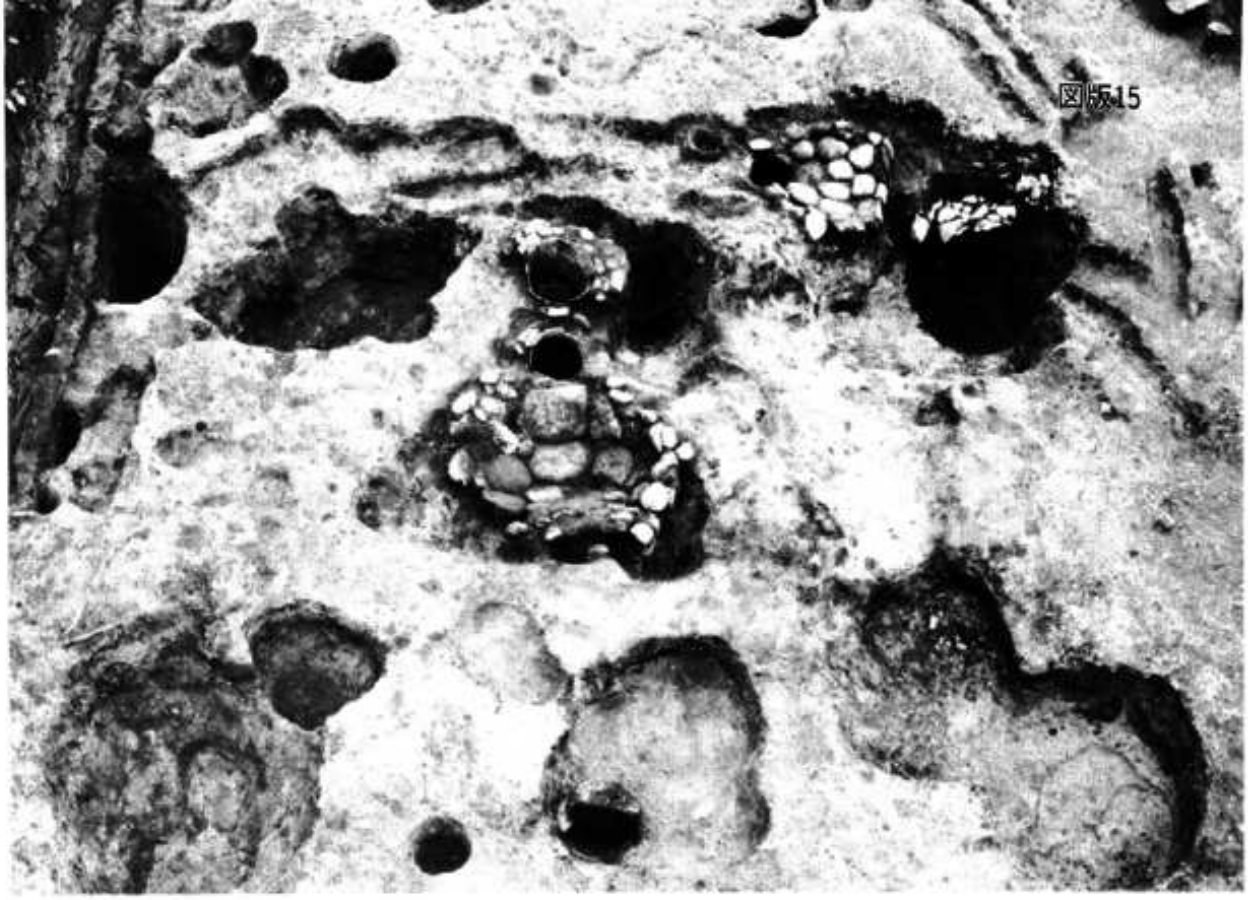
EL70近接（E↑）

図版14



ＥＬ239近接（埋設土器出土状況）（ＳＷ↑）

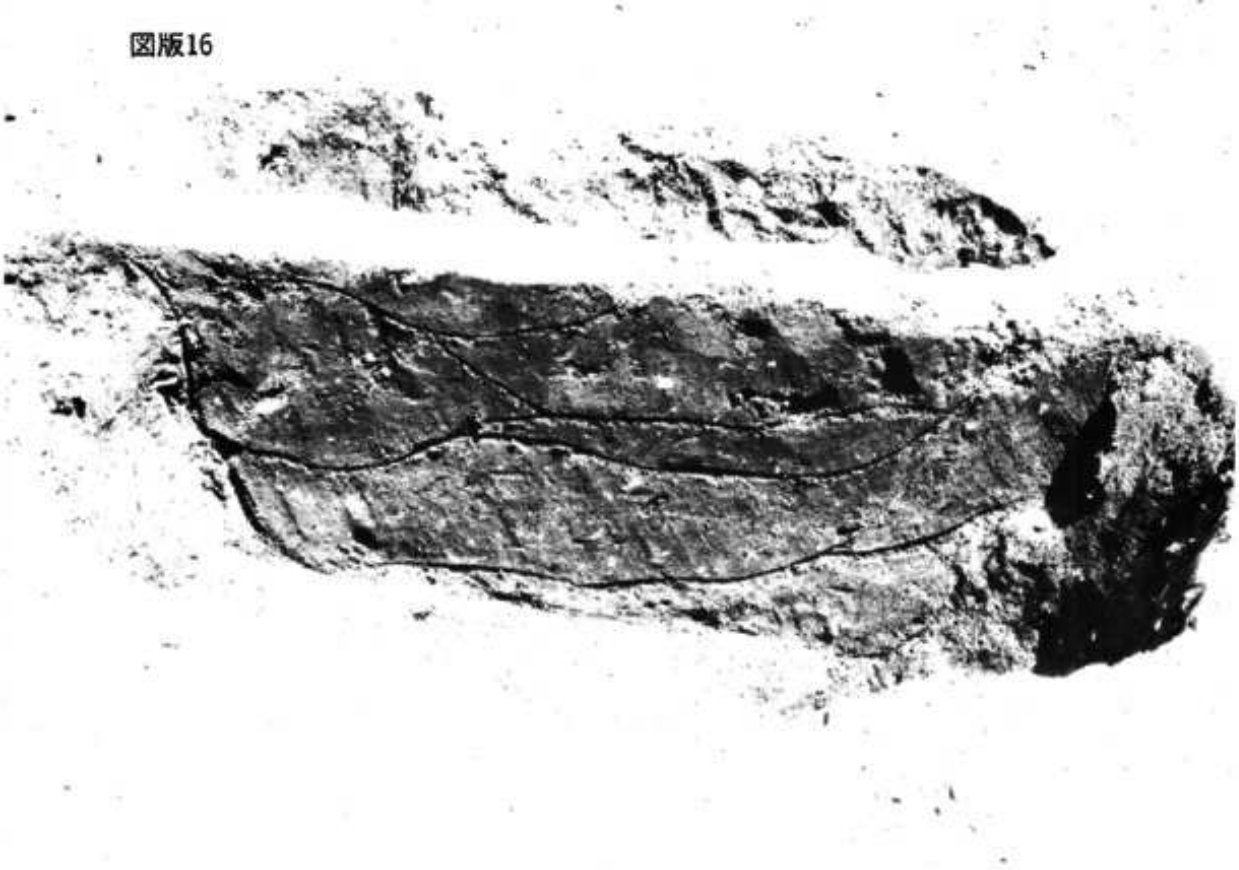
２号住居跡ＥＰ１・剥片出土状態（ＳＥ↑）



3・5・6号土壙全景（SE↑）

1号土壙全景（SE↑）

図版16



3号土壙土層セクション（SW↑）

3号土壙内一括土器出土状態（SW↑）

E L 233埋設土器出土状態（NW↑）

E L 233埋設土器出土状態（NW↑）

36号溝跡全景（N↑）

28号土壙全景（NE↑）

7・8号土壙近接・土層セクション（S↑）

10・11号土壙近接・土層セクション（N↑）

図版20

3～5－16～20G全景（NW↑）

54号土壙近接・土層セクション（SE↑）

6～8－16～20G全景（NW↑）

57号土壙土層セクション（E↑）

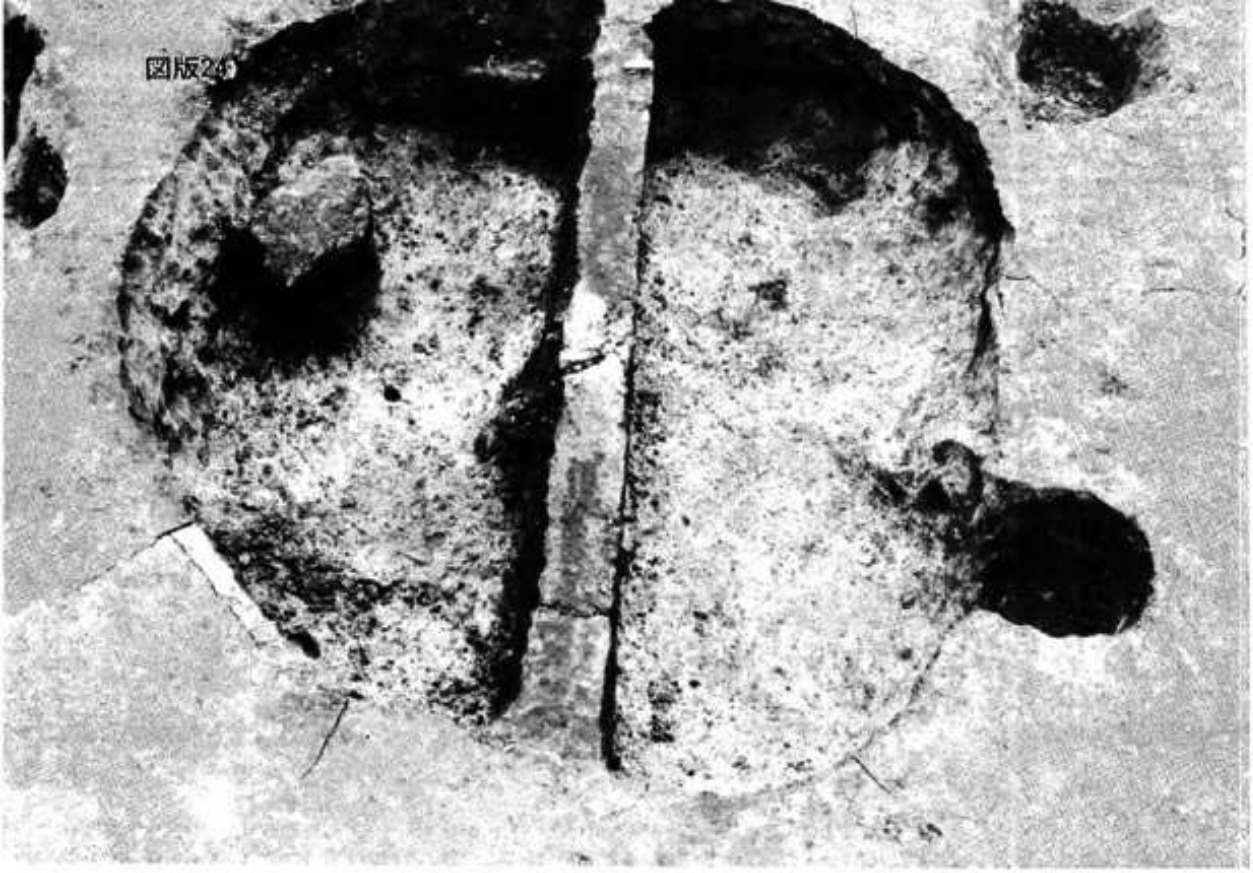
図版22

135・136・137号土壙全景（E↑）

135・136・137号土壙土層セクション（S↑）

15.16.17号土壙全景（E↑）

15号土層セクション（E↑）

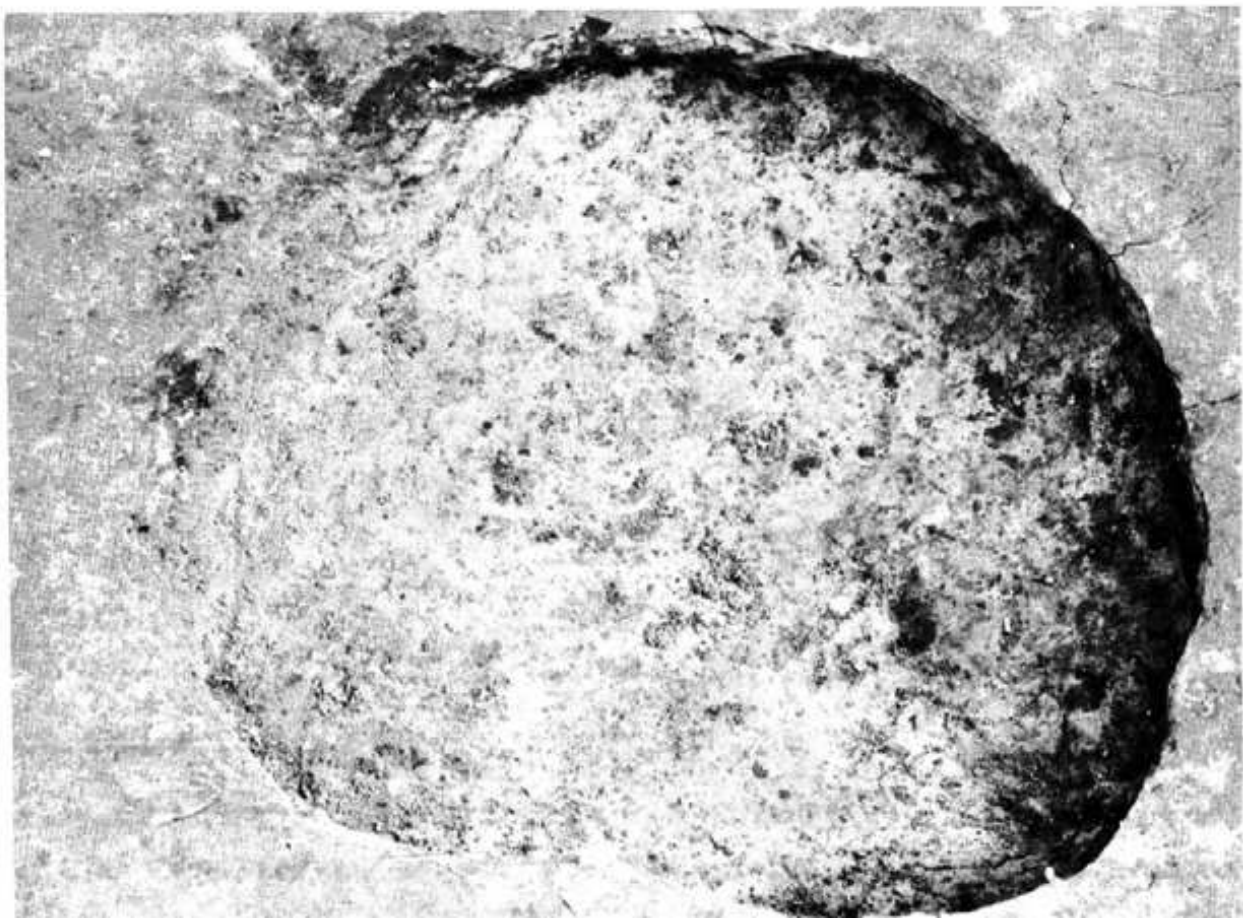


209号土壙全景（N↑）

203・204・207号土壙全景（NE↑）

146号土壙全景（N↑）

219・220号土壙全景（NW↑）

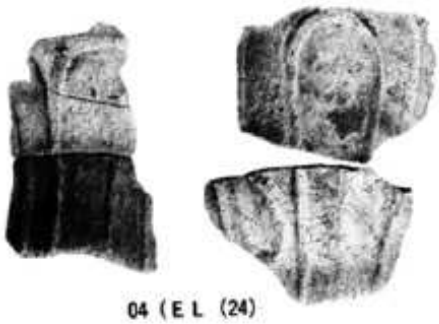


02（5—26G）

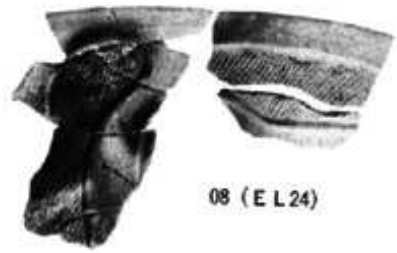
01
（6—41G）

03（ＳＴ２覆土）

05（ＥＬ233）



04（ＥＬ（24）



08（ＥＬ24）

06（ＥＬ70）

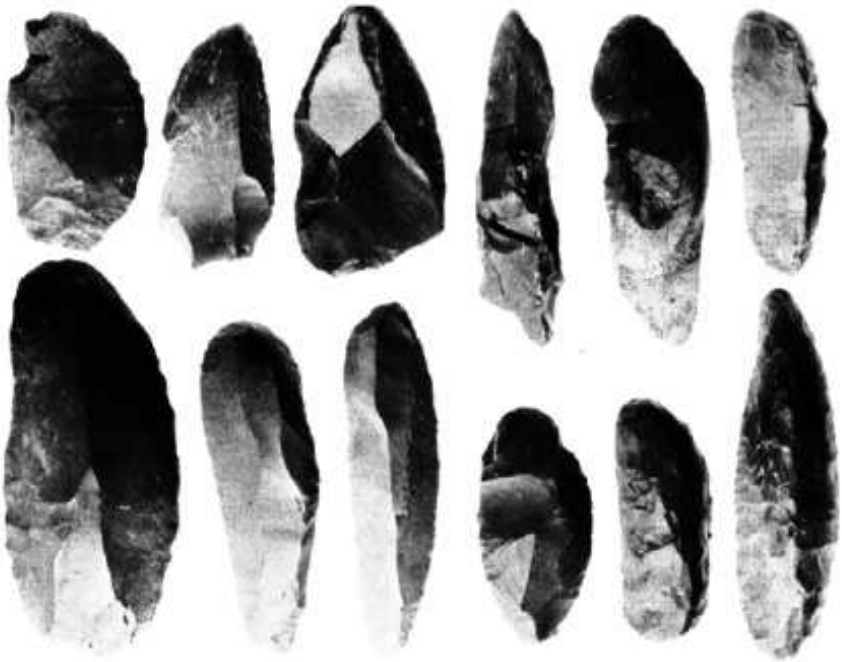
07（ＥＬ70）

09（ＥＬ24）

定形・一括土器・土偶

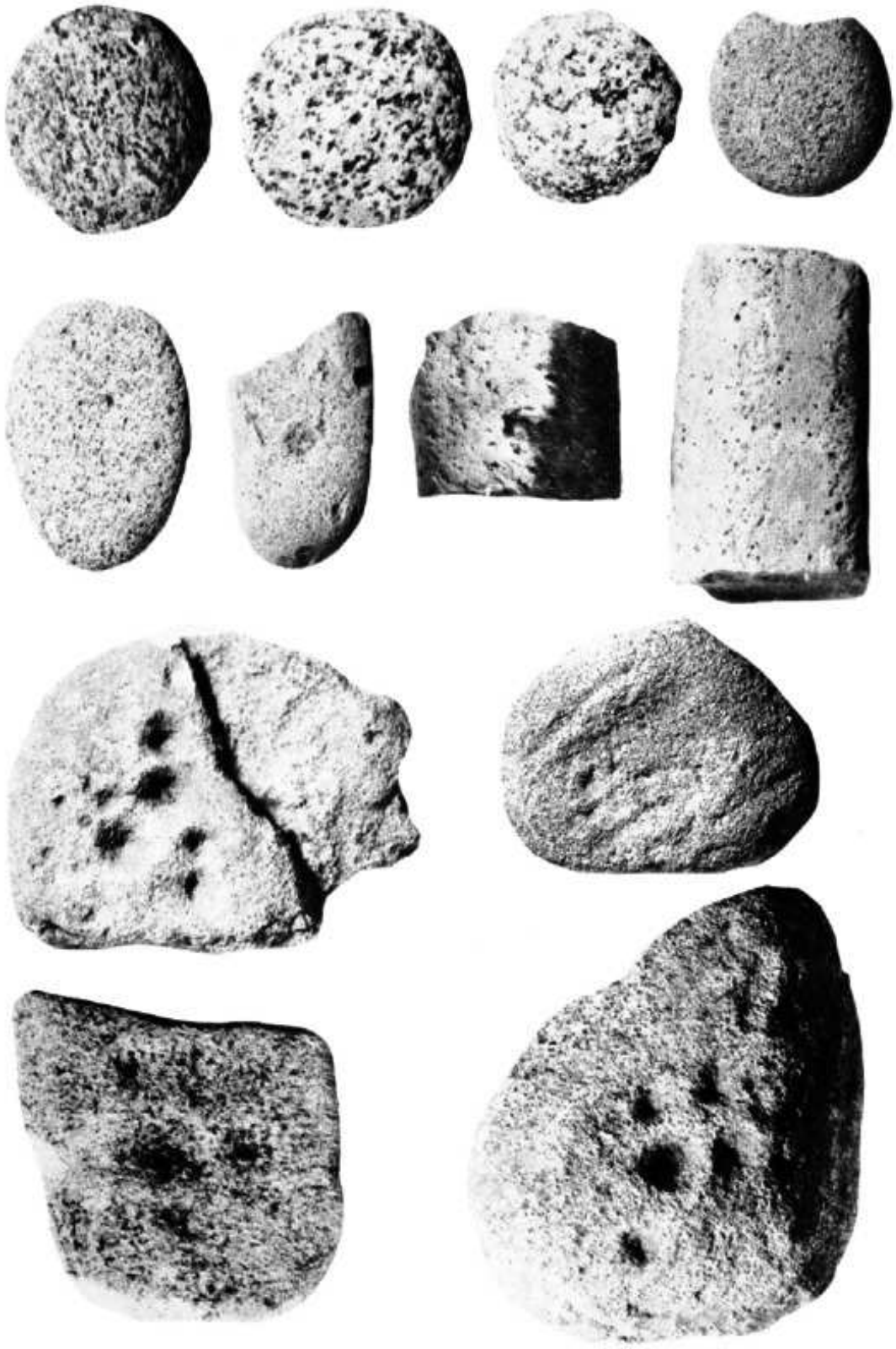
図版27

出土石器（1）



出土石器（2）

出土石器（3）



出土石器（4）

※　裏表紙のマークは昭和41年５月に定められた「文化財愛護のシンボルマーク」です。このシンボルマークは、ひろげた両方の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗栱（組みもの）のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

山形県埋蔵文化財調査報告書第41集

うぐいす沢遺跡

第一次発掘調査報告書

昭和56年３月25日　印刷
昭和56年３月31日　発行

発行　山形県教育委員会
印刷　大風印刷